都城市文化財調査報告書第36集

HIRA MINE — SITE

平 峰 遺 跡

— 民間分譲住宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1995年3月

宮崎県都城市教育委員会

序

この報告書は、分譲住宅地造成に伴い、都城市教育委員会が有限会社都城信用不動産の依頼を受けて発掘調査を行った、平峰遺跡の調査報告書です。

都城市は、宮崎県の南西部に位置し、東に鰐塚山系、北西に高千穂峰といった山々に囲まれた広大な盆地のほぼ中心部にあり、「島津庄」の中心地として、また九州自動車道をはじめとした国道・主要地方道が縦横に延びる南九州東部の中核都市として、古来より現代まで常に栄えてきたところです。

さて、当市の埋蔵文化財発掘調査は増加の一途をたどっており、それに比例して調査の成果への関心も高まってきつつあります。埋蔵文化財をはじめとした多くの文化遺産が正しく後世へ伝わるように、今後ともこうした調査に対する関係機関の方々のより一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

本遺跡からは弥生・中世の遺構・遺物が出土しており、これらが埋蔵文化財への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究資料として活用していただければ幸いです。

最後に、極寒の中で発掘作業に従事していただいた市民の皆様をはじめ、現場における調査や出土資料の整理から報告書作成に至るまで、ご指導・ご協力をいただきました関係各機関や多くの先生方に対し心より厚く御礼申し上げます。

1995年3月31日

都城市教育委員会
教育長　隈　元　幸　美

例　　言

1．本書は民間分譲住宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、同市文化課主事補米澤英昭が担当した。

3．調査は平成７年１月11日から同年２月１日にかけて実施した。

4．遺構実測図の作成は、米澤が中心になって行い、野口虎男・中原貞良・浜田寛・坂元トミ子・大盛祐子・下田代清海・阿久根敏恵・吉村則子・平川樹高の助力を得た。また、遺構・遺物分布図の作成には、テクノ・システム株式会社の遺跡調査システム“ＳＩＴＥ”を用いた。

5．遺物の実測は米澤・猪股幸千代・池谷香代子・雁野あつ子・水上和子が、製図は米澤が行った。

6．遺構・遺物の写真撮影は、米澤が行った。

7．使用した基準方位は磁北であり、レベルは海抜絶対高である。

8．本書の執筆・編集は米澤が行った。

9．本書を執筆するにあたっては、都城市文化財専門員重永卓爾氏、都城市教育委員会矢部喜多夫氏・乗畑光博氏・横山哲英氏らのご教示を得た。

10．本書に関する遺物・記録類（写真・図面等）は都城市立図書館内埋蔵文化財整理収蔵室で収蔵・保管している。

11．本書では、下記の通りの略号を用いている。

ＳＣ－土　坑　　ＳＤ－溝状遺構　　ＳＦ－道路状遺構

Ｐ－　柱　穴

目　　次

序　文 …… 1
例　言 …… 2
目　次 …… 3
第１章　序説 …… 5
　１．調査に至る経緯 …… 5
　２．調査体制 …… 5
第２章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 6
第３章　調査の記録 …… 8
　１．調査の経過と概要 …… 8
　２．遺跡の層序 …… 8
　３．遺構・遺物 …… 10
第４章　まとめ …… 33

挿　図　目　次

第１図　遺跡立地図 …… 6
第２図　遺跡周辺地形図 …… 7
第３図　調査区域図 …… 9
第４図　遺構配置図 …… 11
第５図　土層断面図 …… 14
第６図　遺構配置図及び土層断面図（１） …… 16
第７図　遺構配置図及び土層断面図（２） …… 17
第８図　遺構配置図及び土層断面図（３） …… 18
第９図　ＳＤ０１内出土遺物実測図（１） …… 19
第10図　ＳＤ０１内出土遺物実測図（２） …… 20
第11図　ＳＤ０２内出土遺物実測図 …… 21
第12図　遺構内出土遺物実測図 …… 22
第13図　包含層内出土遺物実測図（１） …… 24
第14図　包含層内出土遺物実測図（２） …… 25
第15図　包含層内出土遺物実測図（３） …… 26
第16図　包含層内出土遺物実測図（４） …… 27
第17図　包含層内出土遺物実測図（５） …… 28

表　目　次

第１表　出土遺物観察表 …… 29

図　版　目　次

図版１ …… 34
図版２ …… 35

第1章　序　　説

1．調査に至る経緯

平成６年11月25日付で、有限会社都城信用不動産より都城市教育委員会へ都城市平塚町の分譲住宅地（約2,100㎡）造成に伴う埋蔵文化財の有無の照会がなされた。当該地は昭和62年に同市教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査による市内遺跡番号5010・平峰遺跡に含まれており、縄文～近世の遺物の散布が確認されていた。そこで都城市教育委員会では、遺跡の状態をより具体的に把握するために、平成６年12月８・13・14日、工事対象地に２ｍ×２ｍのトレンチを６ヶ所設け、試掘調査を実施した（第３図）。その結果わずかな攪乱が見受けられたものの、遺物包含層の遺存状態は良好で、同層より弥生時代の土器・中世の陶器類、溝状遺構を検出した。これにもとづき、有限会社都城信用不動産と都城市教育委員会の間で協議した結果、取付道路部分350㎡において記録保存のための発掘調査を実施することとなり、平成６年12月26日には、両者間において委託契約が結ばれた。現場における発掘調査は平成７年１月11日から同年２月１日まで行い、引き続き遺物の整理を行った。

2．調査体制

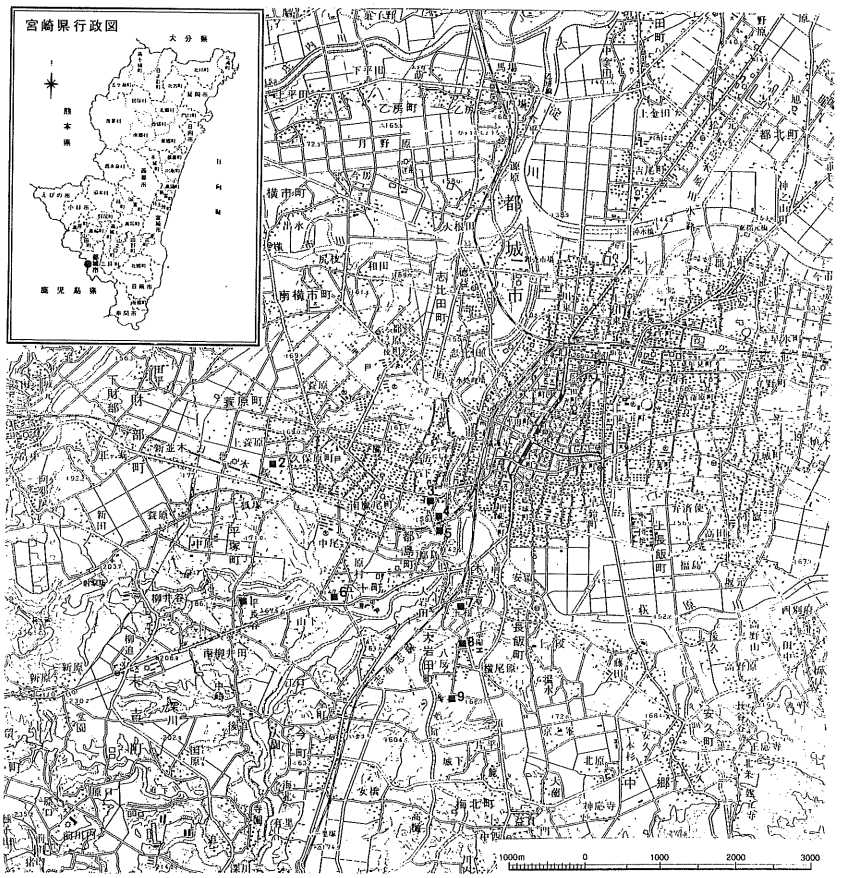
発掘調査は都城市から同市教育委員会が委託を受けて実施し、経費の運用は同市教育委員会文化課が行った。調査の組織は以下の通りである。

〔調査責任者〕都城市教育長　隈　元　幸　美
〔調 査 総 括〕都城市文化課長　松　山　　充
〔調査事務局〕同文化課長補佐　遠　矢　昭　夫
　　同文化財係長　永　野　元　保
〔調　査　員〕同主事補　米　澤　英　昭
〔発掘作業員〕鴇　松雄　阿久根敏恵　吉村　則子　藤田フヂ子　岩切ユキ子
　　蒲生ミツ子　宮元　孝子　南　スミ子　立山　君子　下田代清海
　　野口　虎男　坂元トミ子　中原　貞良　大盛　祐子　平川　樹高
　　鴇　芳明　釘崎トミ子　有水　トミ　荒ヶ田エダ　曽原　主吉
　　楠牟礼エイ子　新田ハル子　荒ヶ田安夫　東前　利雄
〔整理作業員〕猪股幸千代　池谷香代子　雁野あつ子　水上　和子

第２章　遺跡の位置と環境

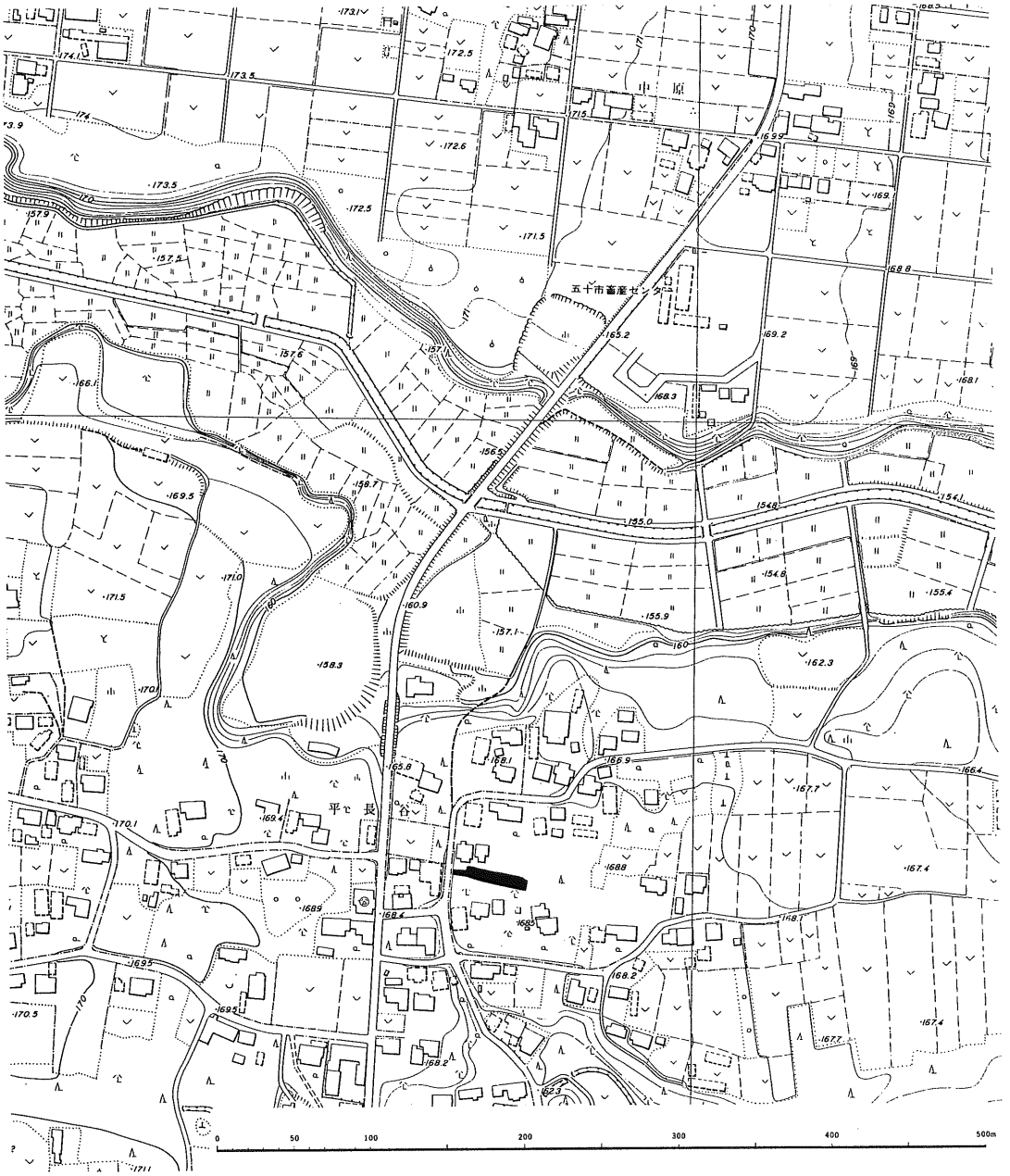
平峰遺跡（市内遺跡番号5010：第１図）は宮崎県都城市平塚町字平長谷に所在する。都城市は宮崎県の南西部に位置し、東の鰐塚山系、北西の霧島山系といった山々に囲まれた盆地のほぼ中央部にある。その中で当遺跡は都城盆地中央、蓑原台地の南部にあたり、南北を流れる大淀川支流の浸食によって形成された舌状台地の付け根部分に立地する。標高は168ｍほどである。

当遺跡周辺には、縄文時代晩期の黒土遺跡をはじめとする古代以前の遺跡や、北郷（都城島津）氏の居城であった都之城跡、中世末の墓群・油田遺跡、南北朝期に島津氏久が陣を構えたと伝えられる場所などが点在しており、昭和62年の分布調査においても縄文～中世の遺物が採集されている。また、付近には孫字であろう「仮屋敷」・「中屋敷」と呼ばれる地域があり、以前に集落が存在していた可能性がある。



１．平峰遺跡　　２．西原第２遺跡　　３．都之城跡（取添）
４．都之城跡（主郭部）　　５．都之城跡（中之城）　　６．油田遺跡
７．大岩田村ノ前遺跡　　８．黒土遺跡　　９．横尾原遺跡

第１図　遺跡立地図



第２図　遺跡周辺地形図

第３章　調査の記録

１．調査の経過と概要

発掘調査は道路敷設全予定地（350㎡）について実施したが、敷設方向に合わせて、東西に細長いかたちとなった。

また、試掘調査において確認していた遺物包含層は霧島御池起源の縄文中期頃噴出とされる軽石（約4,300年前：通称黄ボラ）上に堆積している黒色系土層（Ⅲ層）である。調査は試掘の結果に基づき、バックホーによって表土（Ⅰ層）を剝ぎ取り、また現状は竹林であったため、竹根の除去も同時に行ったのち、10ｍ×10ｍのグリッドを設け、その後、Ⅳ層（御池軽石層）上面まで手作業で掘り下げた。なお、現場における調査期間は平成７年１月11日から２月１日までである。

２．遺跡の層序

本遺跡調査区域の地層はほぼ平坦に堆積していた。当地域において年代推定の基準となる桜島起源の文明軽石（白ボラ：Ⅱ層）、霧島御池起源の軽石（黄ボラ：Ⅳ層）の両火山灰層も良好に遺存しており、この両層間に遺物包含層である黒色系土層（Ⅲ層）がある。以下、各層について説明する。

Ⅰ層：白色パミスを含む褐色砂質土（旧耕作土）

Ⅱ層：文明軽石層（約420年前）

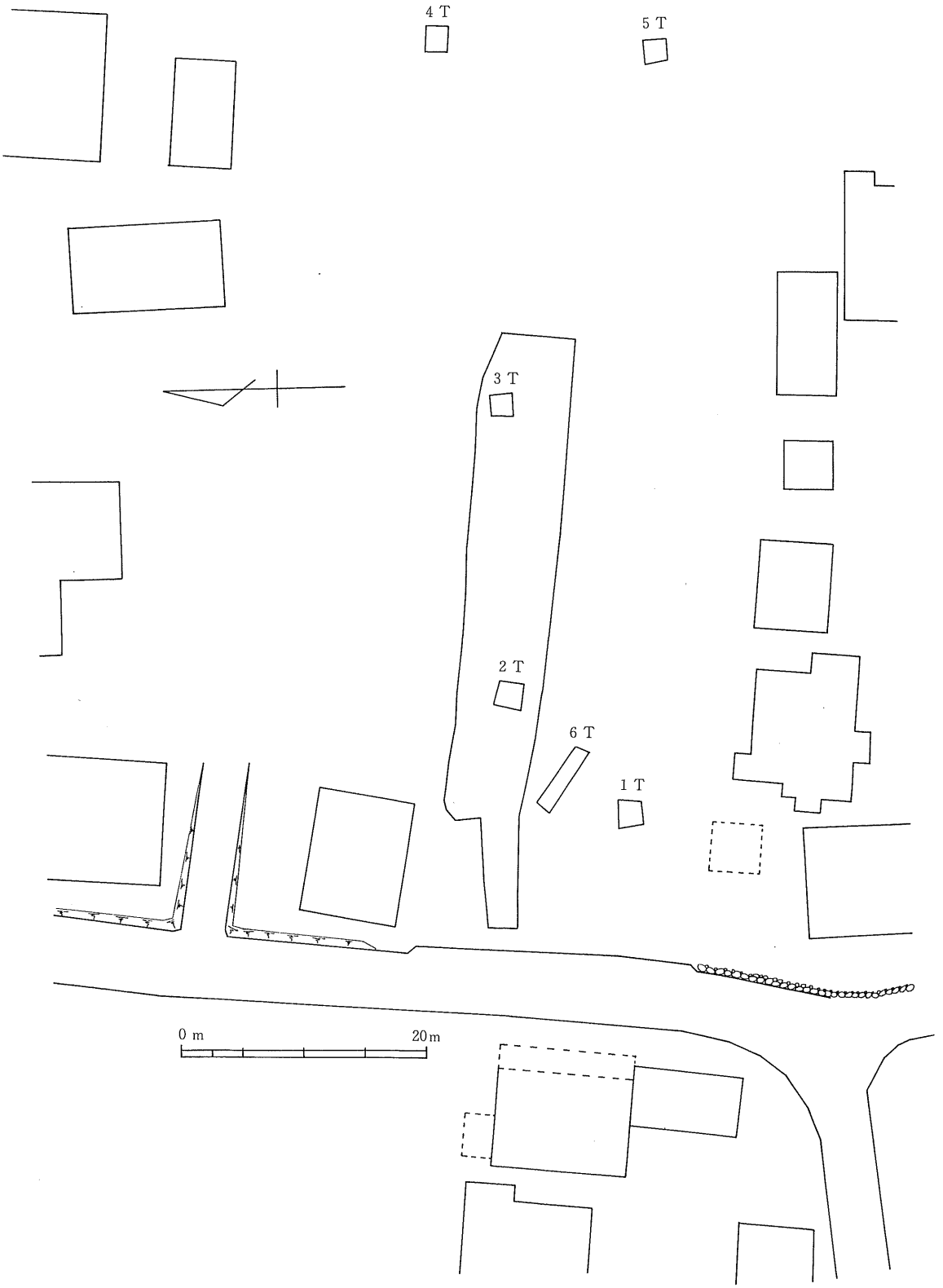
Ⅲ層：オレンヂパミスを含む黒褐色粘質シルト

Ⅳ層：御池軽石層（約4,300年前）

Ⅴ層：黒色粘質シルト

Ⅵ層：アカホヤ火山灰（約6,300年前）

Ⅶ層：黒褐色粘質シルト（ⅥとⅧの漸移層）



第３図　調査区域図

3．遺構・遺物

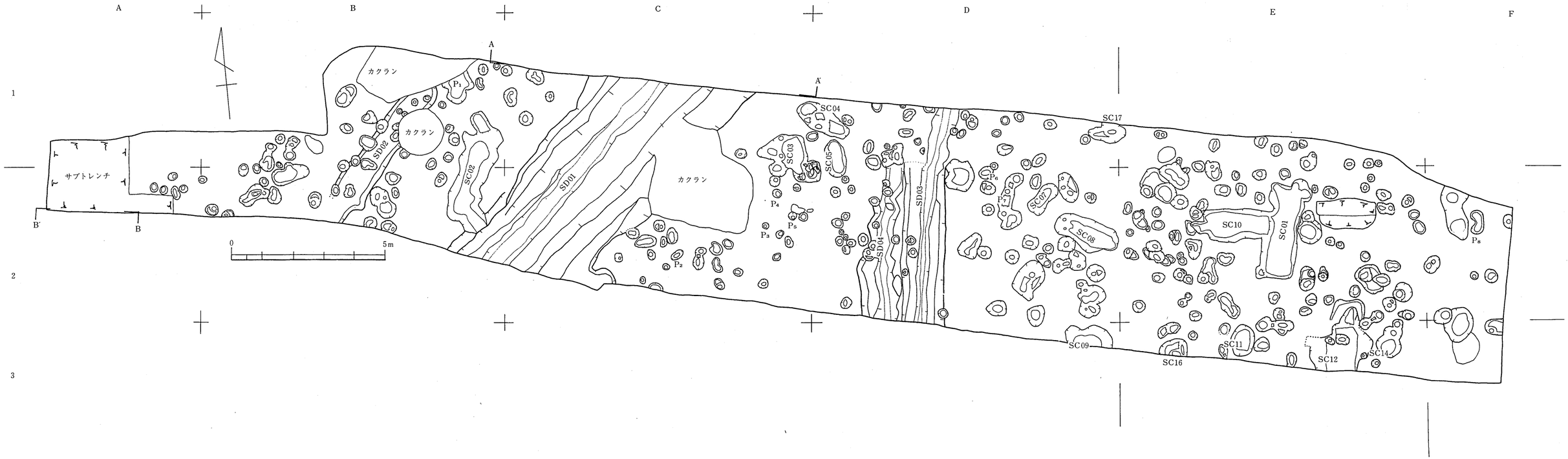
本遺跡の遺物包含層であるⅢ層より遺物を、またⅣ層直上で遺構を検出した。出土遺物の時期は弥生・古墳・中世で、遺構もこれに伴うものである。

溝状遺構（ＳＤ01：第６図）

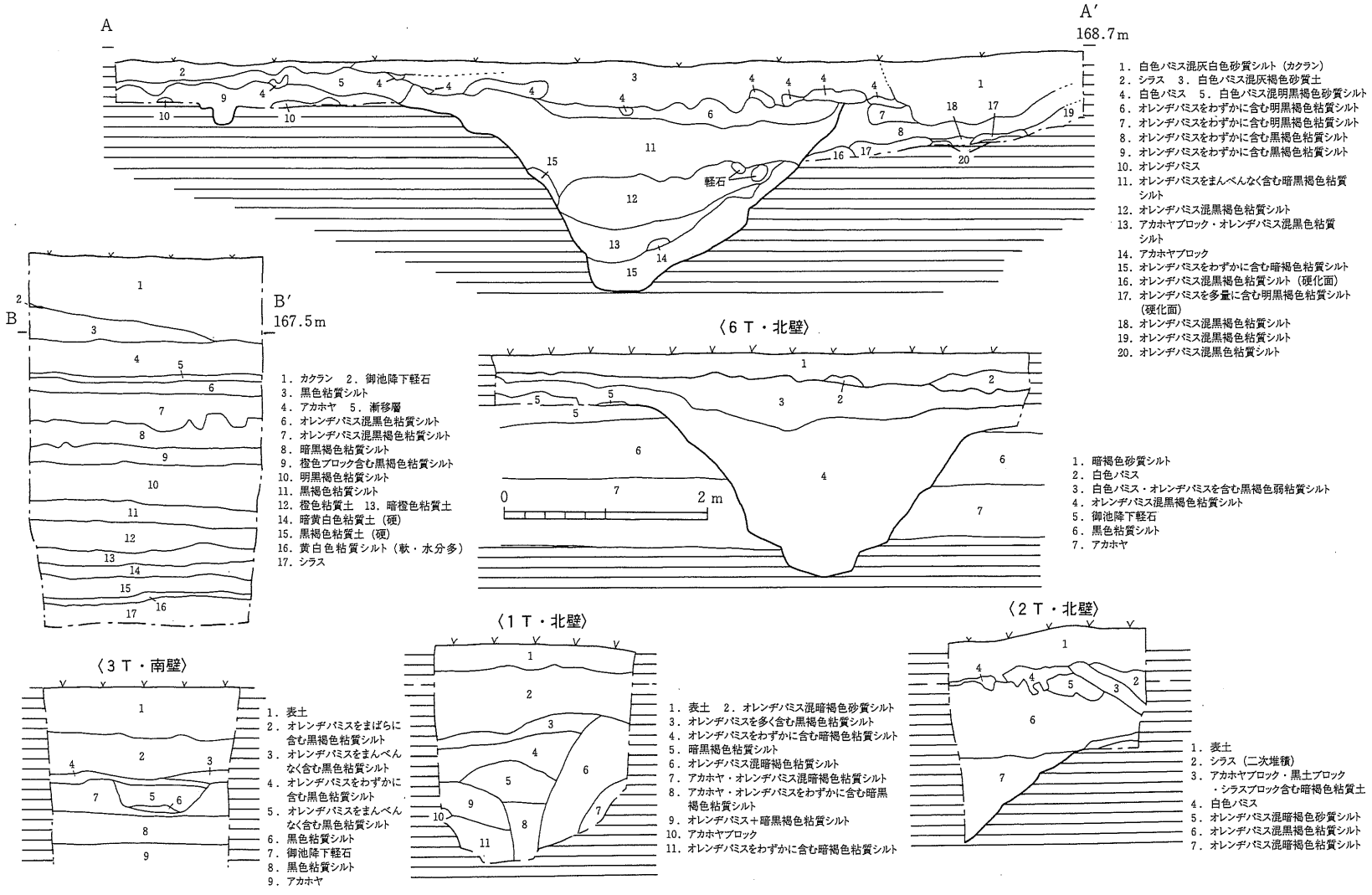
Ｃ－１・２区で検出した。北東－南西に走行する。底面はアカホヤ直下層に達し、検出面からの深さ約1.6ｍ、検出面での最大幅は4.2ｍを測る。部分的に攪乱による破壊がある。形状は箱堀状を呈し、最下部はさらに一段掘り下げられている。溝壁は西側が急で東側は比較的緩斜面を呈す。東側には３条の道路状遺構と思われる硬化面を伴う。埋土中からは多数の遺物が出土しており、主に上層から弥生土器が、下層からは中世の遺物が確認された。図示しうるもののみを第９・10図に示した。１・２は胴部片で、ともに２条の刻目突帯がみられる。２は突帯・刻みともに小さいが、１は突帯・刻みが２より大きい。３は甕の口縁部で、口唇部とその直下に刻目突帯を有する。刻目は小さく、外面にタテ方向のハケ目がみられる。４は刻目突帯を持つ。５は甕の口縁部である。口唇部は厚く、口唇部から膨らみをもたずに胴部へ連なる。内外に横位のナデ調整が施されている。６は壺の底部か。７～９は甕の口縁部である。７は口唇部がM字状の断面形態をしている。９は７同様M字状だが、口縁部の突帯が少し長い。またその傾きから、口縁部が内湾し胴部がやや膨らむタイプと思われる。10は1/2以上が欠損しているが、その形状から紡錘車と思われるものである。片面には指頭痕が明瞭に残る。推定径は8.0㎝を測る。11～18は土師器である。11・12・14は坏、13は鉢型で，全ての底部には糸による切り離しの痕跡が見受けられる。また11・12・14には板状圧痕も確認できる。口径は11が12.1㎝、12が13.2㎝を測る。12・14は11に比べて口縁部が大きく開き、11は口唇部が外反する。15～18は小皿である。これも坏同様糸切りで、断面形からみれば16と17が類似する。各々の口径は15が8.3㎝、16が7.6㎝、17が7.7㎝、18が8.0㎝を測る。19～22は東播磨系（魚住系）とみられる須恵質陶器である。19は口径29.8㎝を測る捏鉢の口縁部で、口唇部が外側へ張り出し、口唇部の丸みがないタイプで、内器面の稜線は明瞭である。口径32.0㎝を測る20も捏鉢の口縁部であるが、口唇部は丸みを帯び、口唇部内側の稜線は緩やかである。21は胴部で外面はタタキ目が明瞭である。22は捏鉢の底部で、接地面と体部間の稜はシャープさを欠く。23は備前擂鉢の胴部である。24～26は青磁である。24は碗の口縁部で鎬蓮弁文のタイプである。25は碗の底部である。26は24と同様であるが、23より蓮弁文が崩れている。27は敲石である。28は磨製石斧で、刃部は欠損している。

溝状遺構（ＳＤ02：第６図）

ＳＤ01の西側、Ｂ－１・２区で確認した。ＳＤ01と同様に延びるが、底は非常に浅い。埋土はⅢ層である。検出面における最大幅約1.1ｍ、深さ約0.1ｍを測る。埋土中からは中世土師器が出土している。第11図に出土遺物を示した。29・30はともに糸切りの小皿である。29は口径6.8㎝を測る。31は糸切りの坏の底部片である。


A
B
C
D
E
F
1
2
3
カクラン
カクラン
カクラン
サブトレンチ
SD01
SD02
SD03
SD04
SC01
SC02
SC03
SC04
SC05
SC07
SC08
SC09
SC10
SC11
SC12
SC14
SC16
SC17
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
A
A'
B
B'
0
5m

第４図　遺構配置図


A
A′
168.7m
1．白色パミス混灰白色砂質シルト（カクラン）
2．シラス　3．白色パミス混灰褐色砂質土
4．白色パミス　5．白色パミス混明黒褐色砂質シルト
6．オレンヂパミスをわずかに含む明黒褐色粘質シルト
7．オレンヂパミスをわずかに含む明黒褐色粘質シルト
8．オレンヂパミスをわずかに含む黒褐色粘質シルト
9．オレンヂパミスをわずかに含む黒褐色粘質シルト
10．オレンヂパミス
11．オレンヂパミスをまんべんなく含む暗黒褐色粘質シルト
12．オレンヂパミス混黒褐色粘質シルト
13．アカホヤブロック・オレンヂパミス混黒色粘質シルト
14．アカホヤブロック
15．オレンヂパミスをわずかに含む暗褐色粘質シルト
16．オレンヂパミス混黒褐色粘質シルト（硬化面）
17．オレンヂパミスを多量に含む明黒褐色粘質シルト（硬化面）
18．オレンヂパミス混黒褐色粘質シルト
19．オレンヂパミス混黒褐色粘質シルト
20．オレンヂパミス混黒色粘質シルト
軽石
B
B′
167.5m
1．カクラン　2．御池降下軽石
3．黒色粘質シルト
4．アカホヤ　5．漸移層
6．オレンヂパミス混黒色粘質シルト
7．オレンヂパミス混黒褐色粘質シルト
8．暗黒褐色粘質シルト
9．橙色ブロック含む黒褐色粘質シルト
10．明黒褐色粘質シルト
11．黒褐色粘質シルト
12．橙色粘質土　13．暗橙色粘質土
14．暗黄白色粘質土（硬）
15．黒褐色粘質土（硬）
16．黄白色粘質シルト（軟・水分多）
17．シラス
〈6T・北壁〉
1．暗褐色砂質シルト
2．白色パミス
3．白色パミス・オレンヂパミスを含む黒褐色弱粘質シルト
4．オレンヂパミス混黒褐色粘質シルト
5．御池降下軽石
6．黒色粘質シルト
7．アカホヤ
0
2 m
〈3T・南壁〉
1．表土
2．オレンヂパミスをまばらに含む黒褐色粘質シルト
3．オレンヂパミスをまんべんなく含む黒色粘質シルト
4．オレンヂパミスをわずかに含む黒色粘質シルト
5．オレンヂパミスをまんべんなく含む黒色粘質シルト
6．黒色粘質シルト
7．御池降下軽石
8．黒色粘質シルト
9．アカホヤ
〈1T・北壁〉
1．表土　2．オレンヂパミス混暗褐色砂質シルト
3．オレンヂパミスを多く含む黒褐色粘質シルト
4．オレンヂパミスをわずかに含む暗褐色粘質シルト
5．暗黒褐色粘質シルト
6．オレンヂパミス混暗褐色粘質シルト
7．アカホヤ・オレンヂパミス混暗褐色粘質シルト
8．アカホヤ・オレンヂパミスをわずかに含む暗黒褐色粘質シルト
9．オレンヂパミス＋暗黒褐色粘質シルト
10．アカホヤブロック
11．オレンヂパミスをわずかに含む暗褐色粘質シルト
〈2T・北壁〉
1．表土
2．シラス（二次堆積）
3．アカホヤブロック・黒土ブロック・シラスブロック含む暗褐色粘質土
4．白色パミス
5．オレンヂパミス混暗褐色砂質シルト
6．オレンヂパミス混黒褐色粘質シルト
7．オレンヂパミス混暗褐色粘質シルト

第５図　土層断面図

溝状遺構（ＳＤ03・ＳＤ04：第７図）

ともにＤ－１・２区で切り合った形で検出した。走行方向は南北で、断面観察等によりＳＤ04→ＳＤ03の時期差が見られる。最大幅はＳＤ03が約1.4ｍ、ＳＤ04が推定1.8ｍ、検出面からの深さはともに0.2ｍほどである。また断面にはＳＤ03中に硬化面（道路状遺構）が２面残っていた。埋土はⅢ層の黒色土系が基調であるが、上部には本遺跡ではほとんどみられない文明降下軽石（Ⅱ層）が堆積しており、このことからＳＤ03・ＳＤ04は15世紀以前のものと推測される。第12図に出土遺物を示した。32は須恵片である。焼成不良のため黄橙色を呈しており、外器面にはタタキ目がみられ、また胎土には長石が見受けられる。33は甕型土器の口縁部である。断面はＭ字状を呈する。

道路状遺構（ＳＦ01）

Ｃ－１・２区、ＳＤ01東で検出した。検出面はⅣ層上である。走行方向はＳＤ01と同様に北東－南西である。遺存状態は断片的で、埋土はオレンヂパミス混褐色粘質シルトである。

道路状遺構（ＳＦ02）

Ｃ－１・２区、ＳＤ01内のＳＦ01直下で検出した。南北に走行する。断片的に残存しており、幅員は不明で、遺物も確認されなかった。埋土はオレンヂパミス混黒褐色粘質シルトである。

道路状遺構（ＳＦ03）

Ｃ－１・２区、ＳＤ01内のＳＦ02直下で検出した。走向・残存状態ともにＳＦ02と同様である。

土坑（ＳＣ01：第８図）

Ｅ－２区で検出した。ＳＣ10と切り合っている。長径（南北）3.0ｍ、短径（東西）1.1ｍ、深さ約0.2ｍを測る。

土坑（ＳＣ02：第６図）

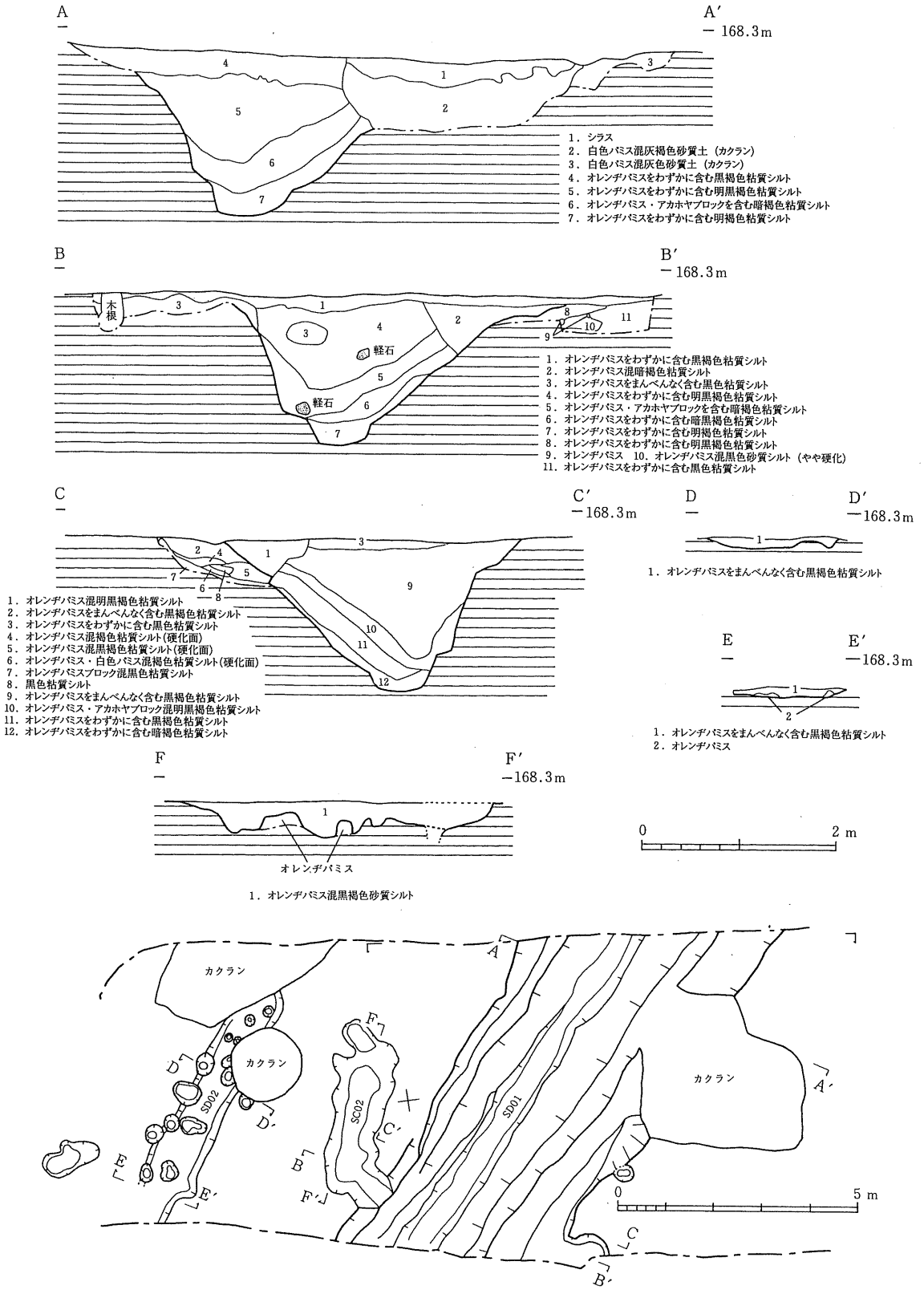
Ｂ－１・２区、ＳＤ01と切り合って検出。南北に細長く延びている。長径（南北）3.3ｍ、短径（東西）1.0ｍ、検出面からの深さは約0.2ｍを測る。

土坑（ＳＣ03：第７図）

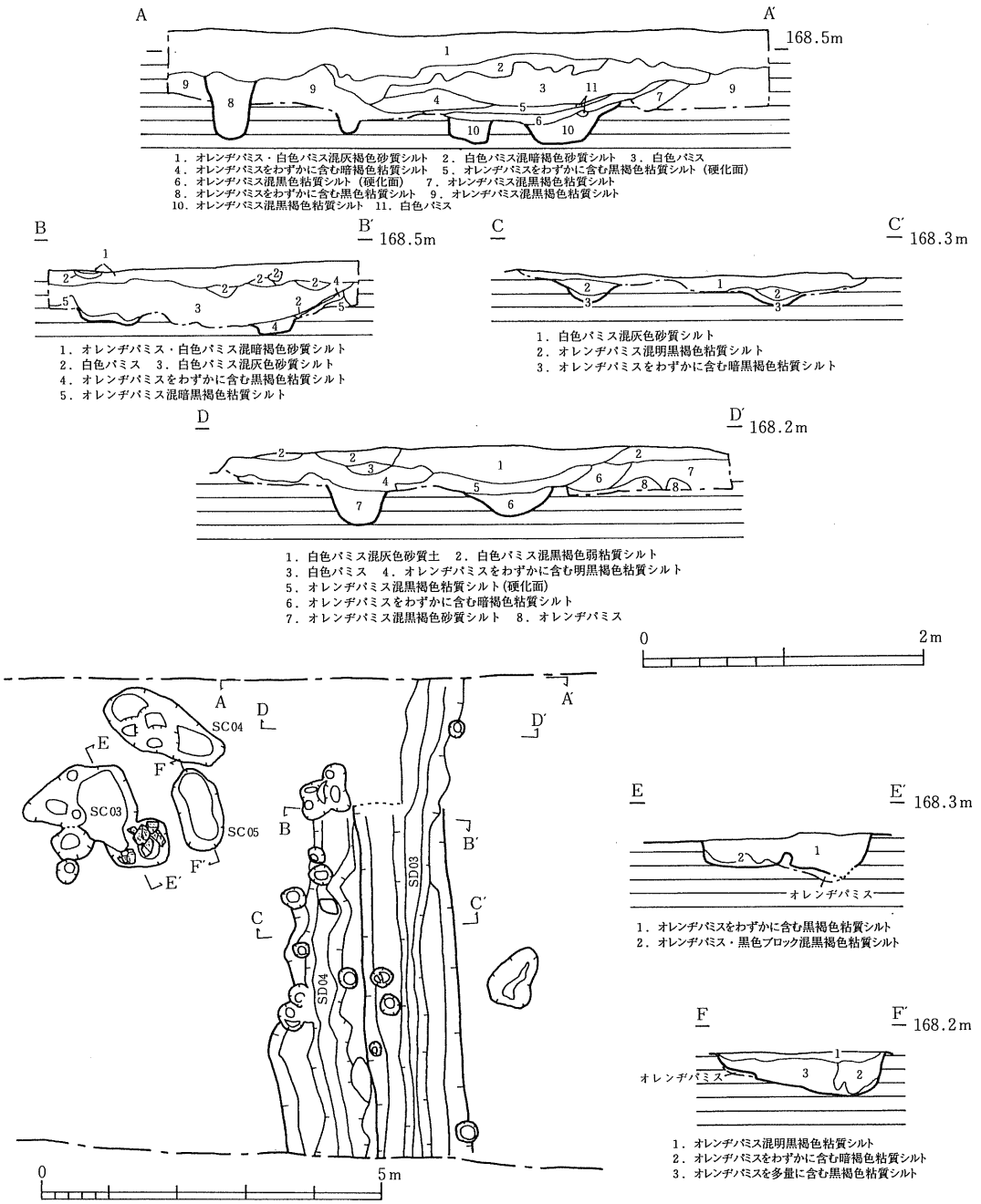
Ｃ－２区、ＳＤ04の西側で確認した。長径1.6ｍ、短径1.4ｍ、深さ0.2ｍを測る。いくつかの柱穴と切り合っており、南側に隣接する柱穴には複数の軽石が埋納されていた。

土坑（ＳＣ04：第７図）

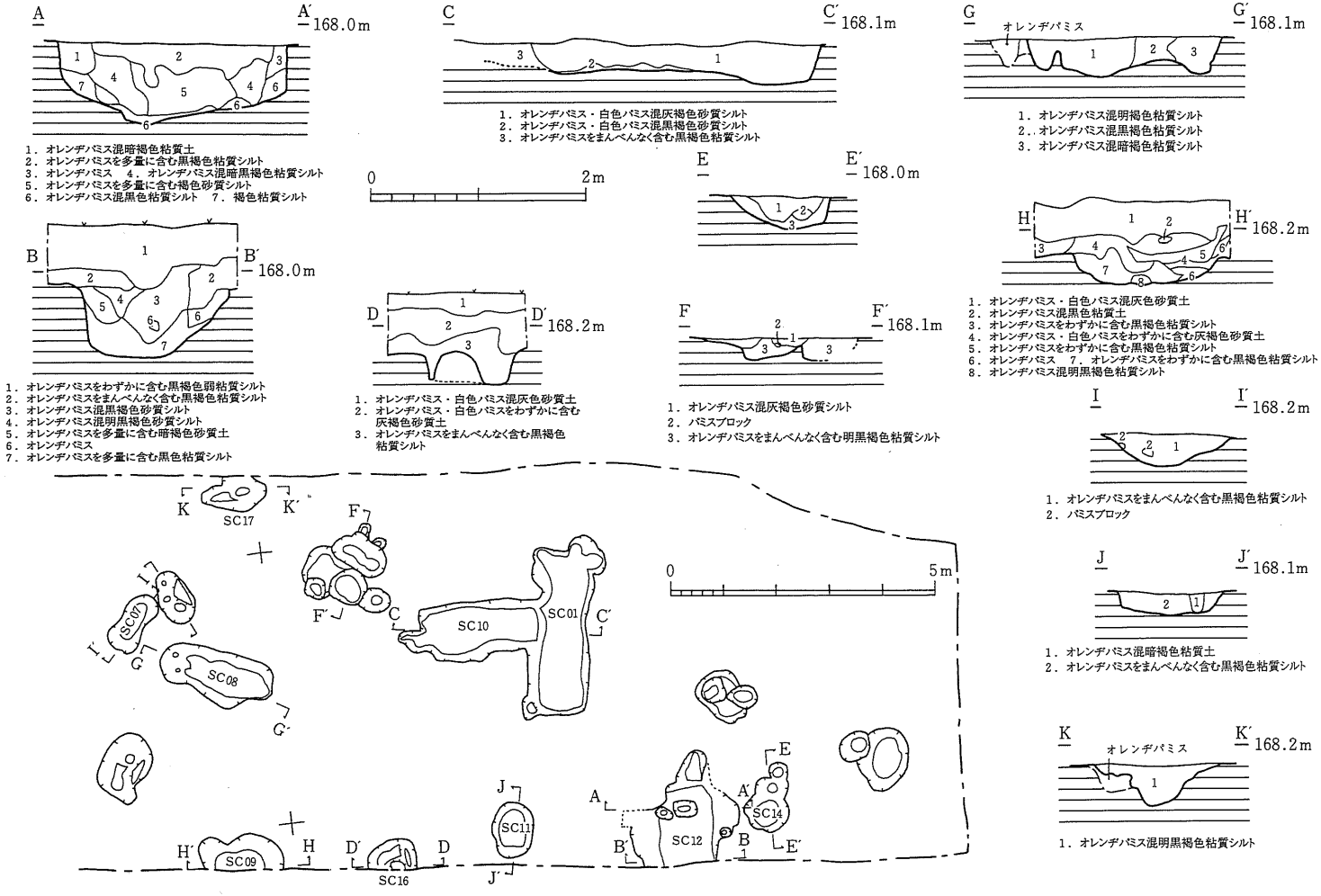
Ｄ－２区、ＳＤ04の西側、ＳＣ03に北接して検出。長径1.8ｍ、短径0.9ｍを測る。



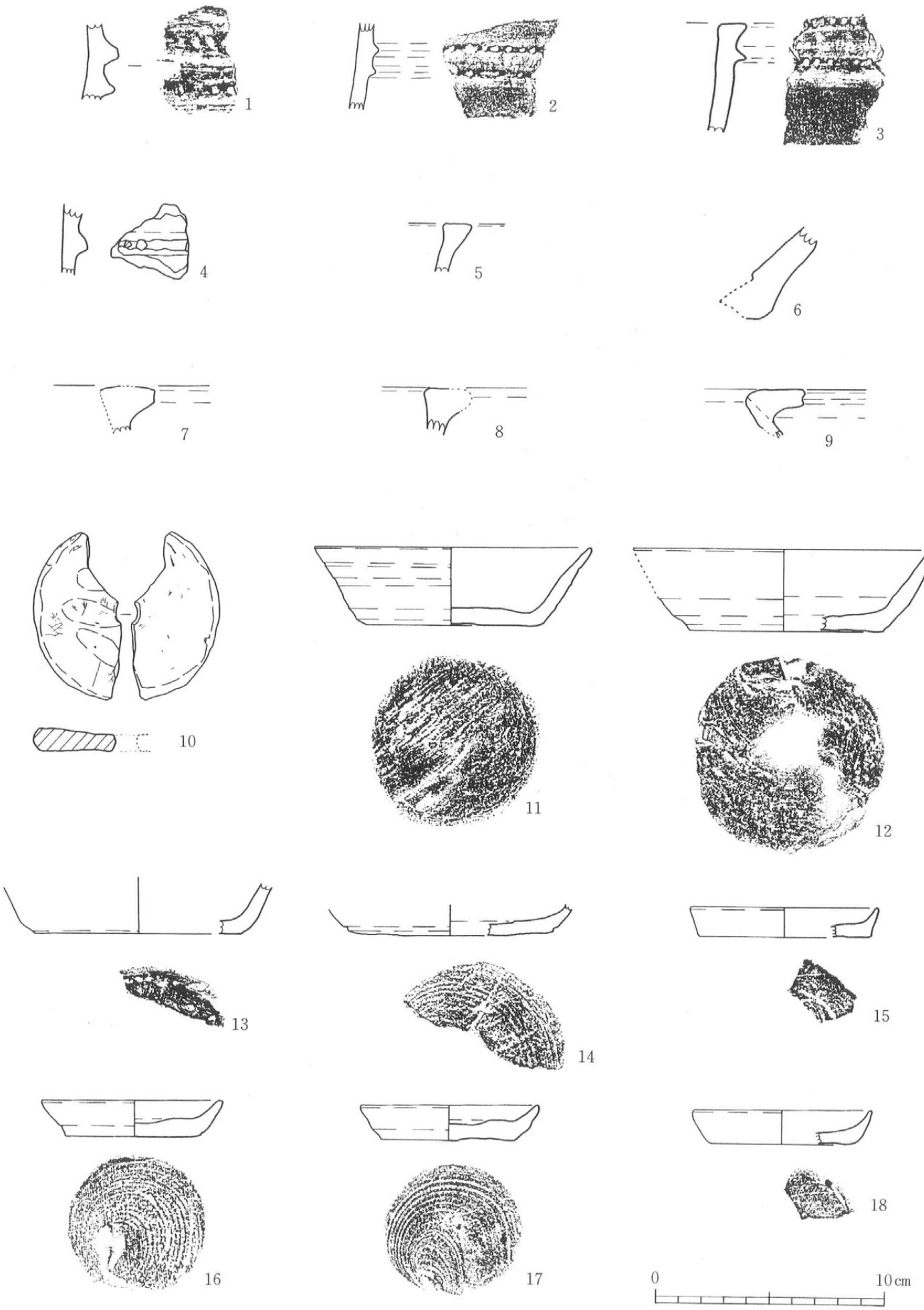
第６図　遺構配置図及び土層断面図（１）



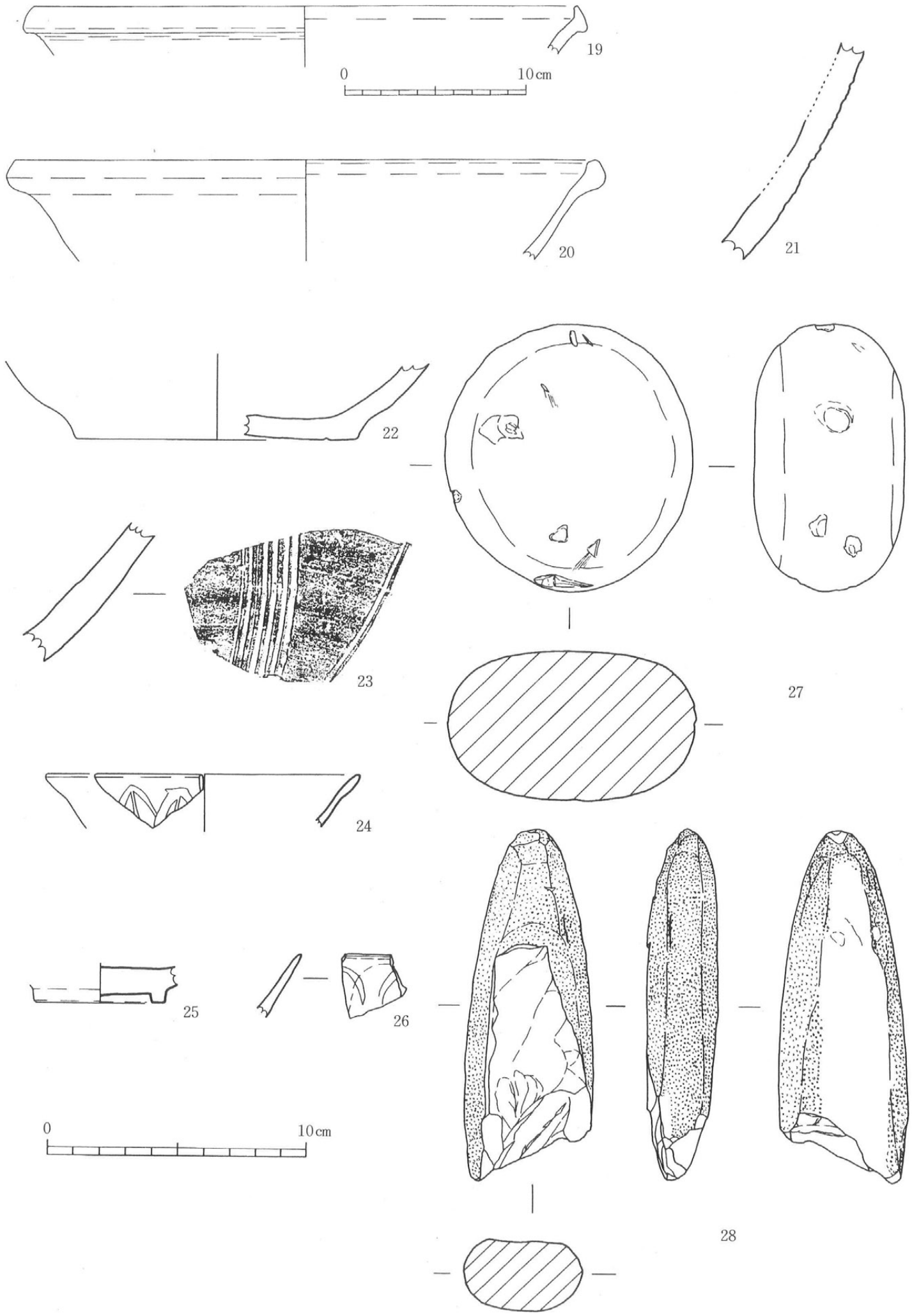
第７図　遺構配置図及び土層断面図（２）



第８図　遺構配置図及び土層断面図（３）



第９図　ＳＤ０１内出土遺物実測図（１）



第10図　ＳＤ０１内出土遺物実測図（２）

土坑（ＳＣ05：第７図）

Ｄ－２区、ＳＤ04の西側、ＳＣ04に南接して検出。長径1.2ｍ、短径0.6ｍ、深さ0.3ｍを測る。第12図に出土遺物を示した。34は甕の口縁部で、口唇部の突帯貼り付け痕は明瞭であり、突帯下部にその名残が認められる。胎土にウンモを含む。

土坑（ＳＣ07：第８図）

Ｄ－２区、ＳＤ03の東側、Ｐ007の東側で検出した。長径1.1ｍ、短径0.5ｍ、深さ0.25ｍを測る。

土坑（ＳＣ08：第８図）

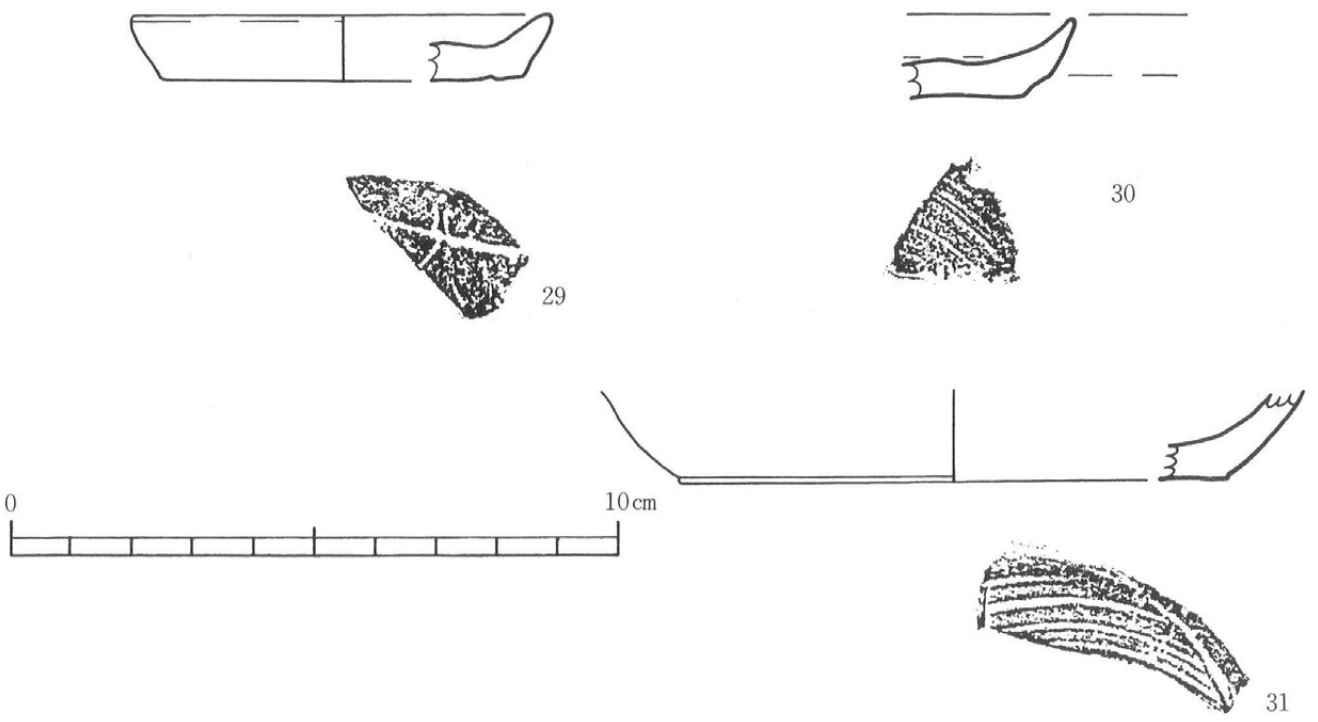
Ｄ－２区、ＳＤ04の東、ＳＣ07の南東側で確認した。長径2.2ｍ、短径0.9ｍ、深さ0.3ｍを測る。

土坑（ＳＣ09：第８図）

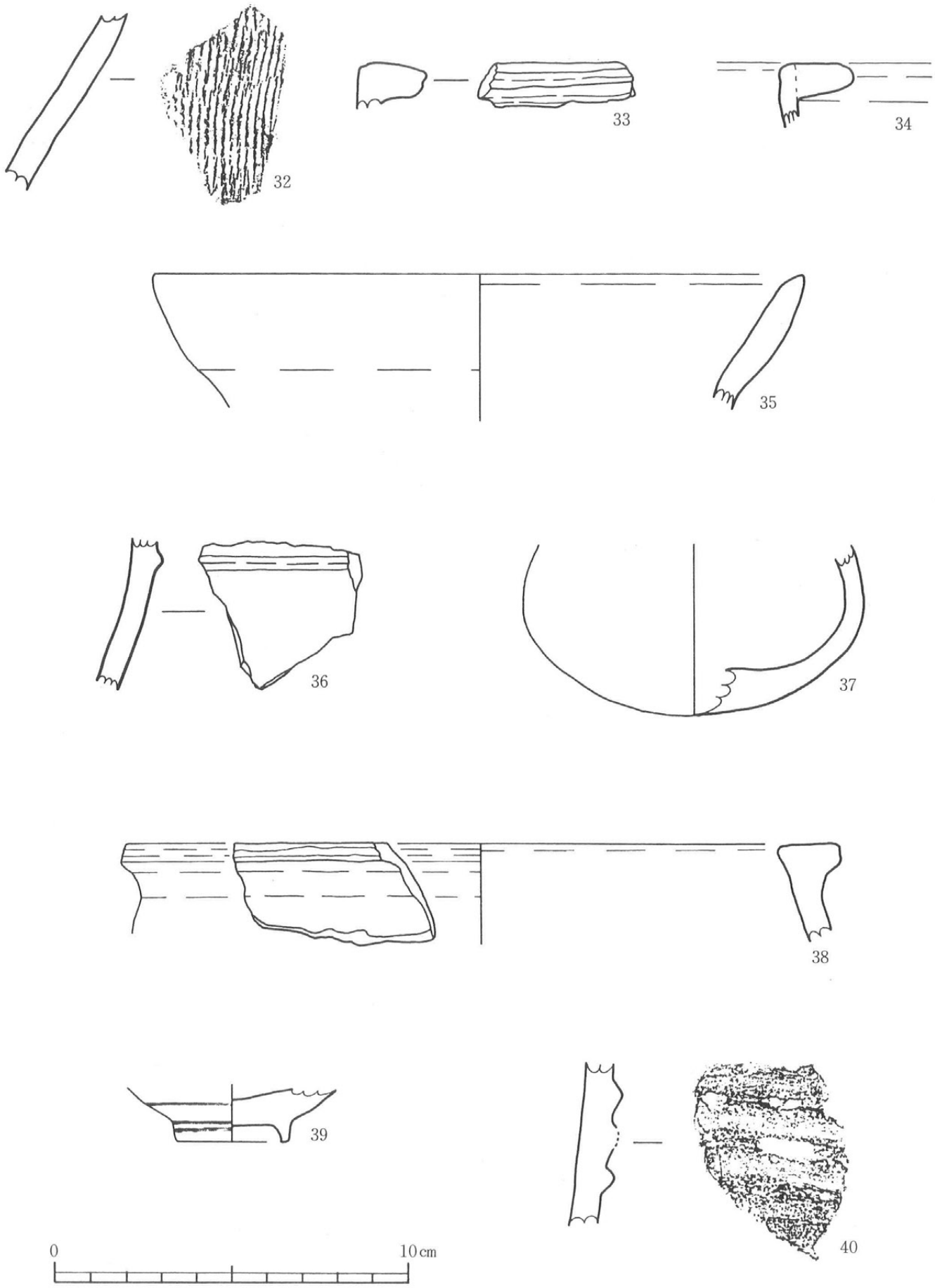
Ｄ－３区、調査区南壁沿いに確認した。長径1.6ｍ、深さ0.3ｍを測る。

土坑（ＳＣ10：第８図）

Ｅ－２区、ＳＣ01と切り合った形で確認したが、断面からの時期差の確定はできなかった。長径推定2.9ｍ、短径1.1ｍ、深さ0.2ｍを測る。第12図に出土遺物を示した。35は土師質土器



第11図　ＳＤ０２内出土遺物実測図



第12図　遺構内出土遺物実測図

壺の口縁部である。口唇部内面直下に稜を持つ。

土坑（ＳＣ11：第８図）

Ｅ－３区、ＳＣ01の南側で確認した。長径1.0ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.2ｍを測る。

土坑（ＳＣ12：第８図）

Ｅ－３区、調査区南壁沿いに確認した。壁面沿いの径1.4ｍ、深さ0.7ｍを測る。第12図に出土遺物を示した。37は土師質土器壺の底部である。

土坑（ＳＣ14：第８図）

Ｅ－３区、ＳＣ12の東側で確認した。長径1.3ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.3ｍを測る。

土坑（ＳＣ16：第８図）

Ｅ－３区、調査区南壁沿いに確認した。壁面沿いの径0.9ｍを測る。

土坑（ＳＣ17：第８図）

Ｄ－１区、調査区北壁沿いに確認した。長径1.2ｍ、深さ0.4ｍを測る。

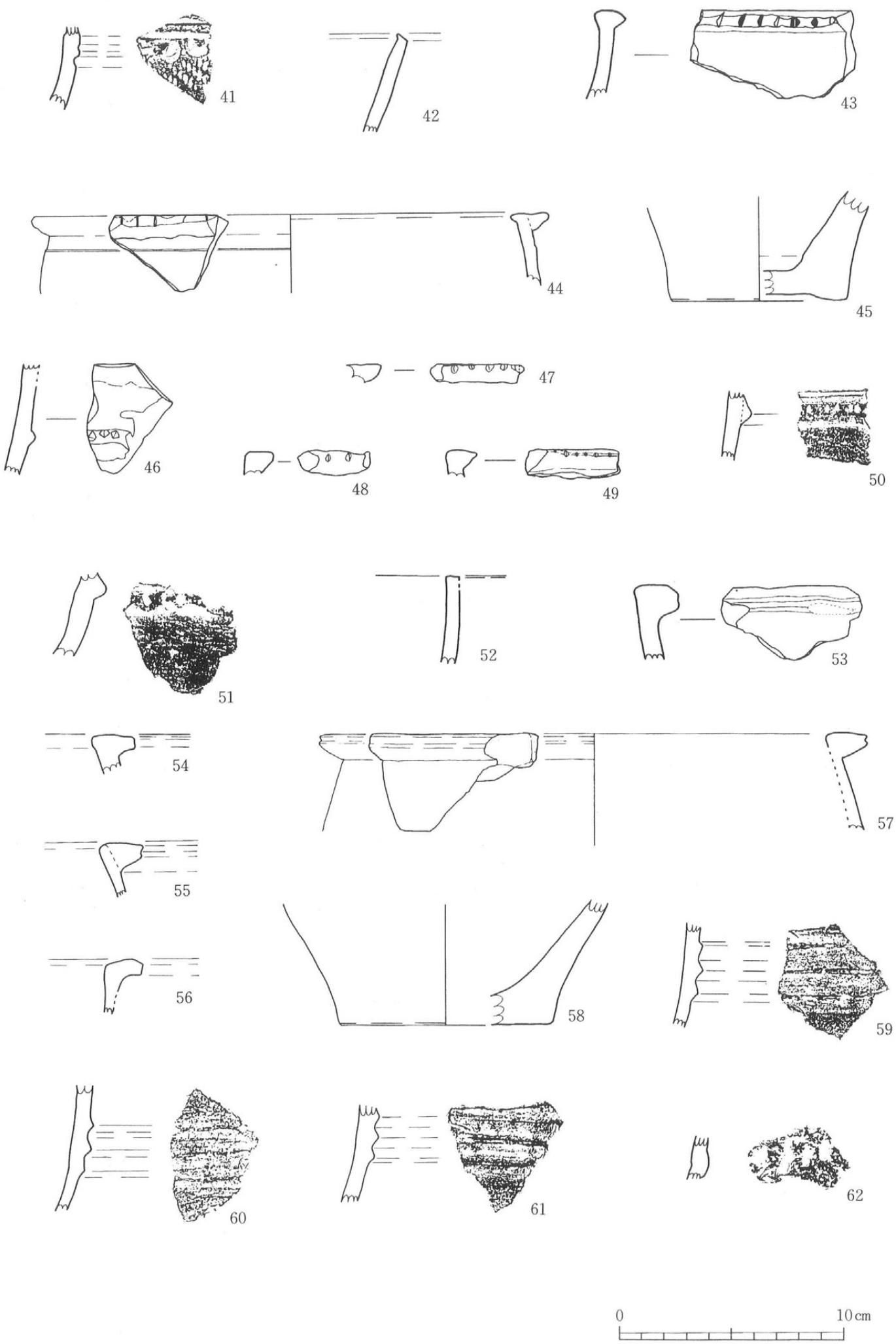
柱穴群（ピット）

１号柱穴（Ｐ００１）はＢ－１区で確認した。北側を攪乱によって破壊されていた。埋土より土器（小片）が出土している。２号柱穴（Ｐ００２）はＣ－２区、ＳＤ01の東側で確認した。埋土より土器（小片）が出土している。３号柱穴（Ｐ００３）はＣ－２区で確認した。埋土より土器（小片）が出土している。４号柱穴（Ｐ００４）はＣ－２区、Ｐ００３の北側で確認した。埋土より口唇部がM字状断面の甕口縁部（遺物番号38）が出土している。５号柱穴（Ｐ００５）はＣ－２区、Ｐ００３の東側で確認した。埋土より三角突帯を有する甕の胴部（遺物番号36）が出土している。６号柱穴（Ｐ００６）はＤ－２区、ＳＤ03東側で確認した。埋土より染付碗の底部（遺物番号39）が出土している。７号柱穴（Ｐ００７）はＤ－２区、Ｐ００６の東側で確認した。埋土より３条の三角突帯を有する甕胴部（遺物番号40）が出土している。８号柱穴（Ｐ００８）はＦ－２区、調査区東端で確認した。

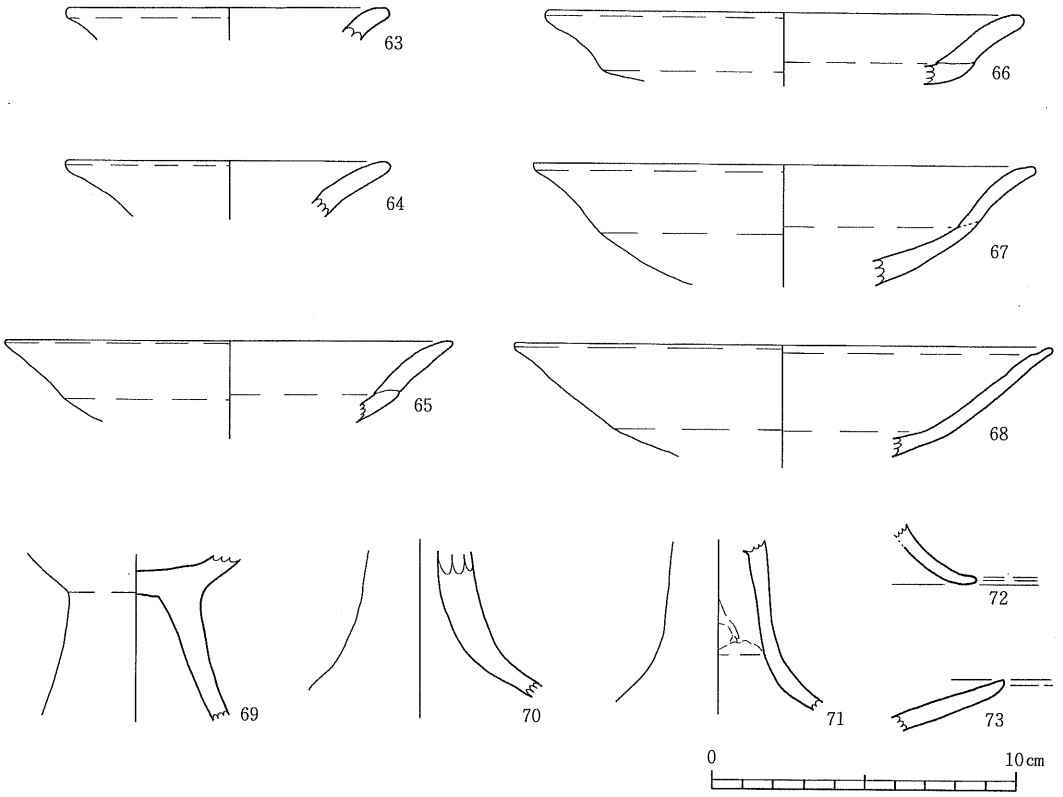
包含層内出土遺物

遺物包含層は基本土層の第Ⅲ層、オレンヂパミスを含む黒褐色粘質シルト層である。同層から比較的多くの遺物を検出することができた。ここには図示しうるもののみを掲載した。

41・42は縄文土器である。41はくの字型口縁深鉢の胴部片で西平式である。42は深鉢の口縁部で、口唇部内側に凹線を持つ。型式は不明だが、このタイプは西平式・三万田式にみられるものである。43・44は甕の口縁部である。43は、やや丸みを帯びた口唇部に刻みを持つ。また

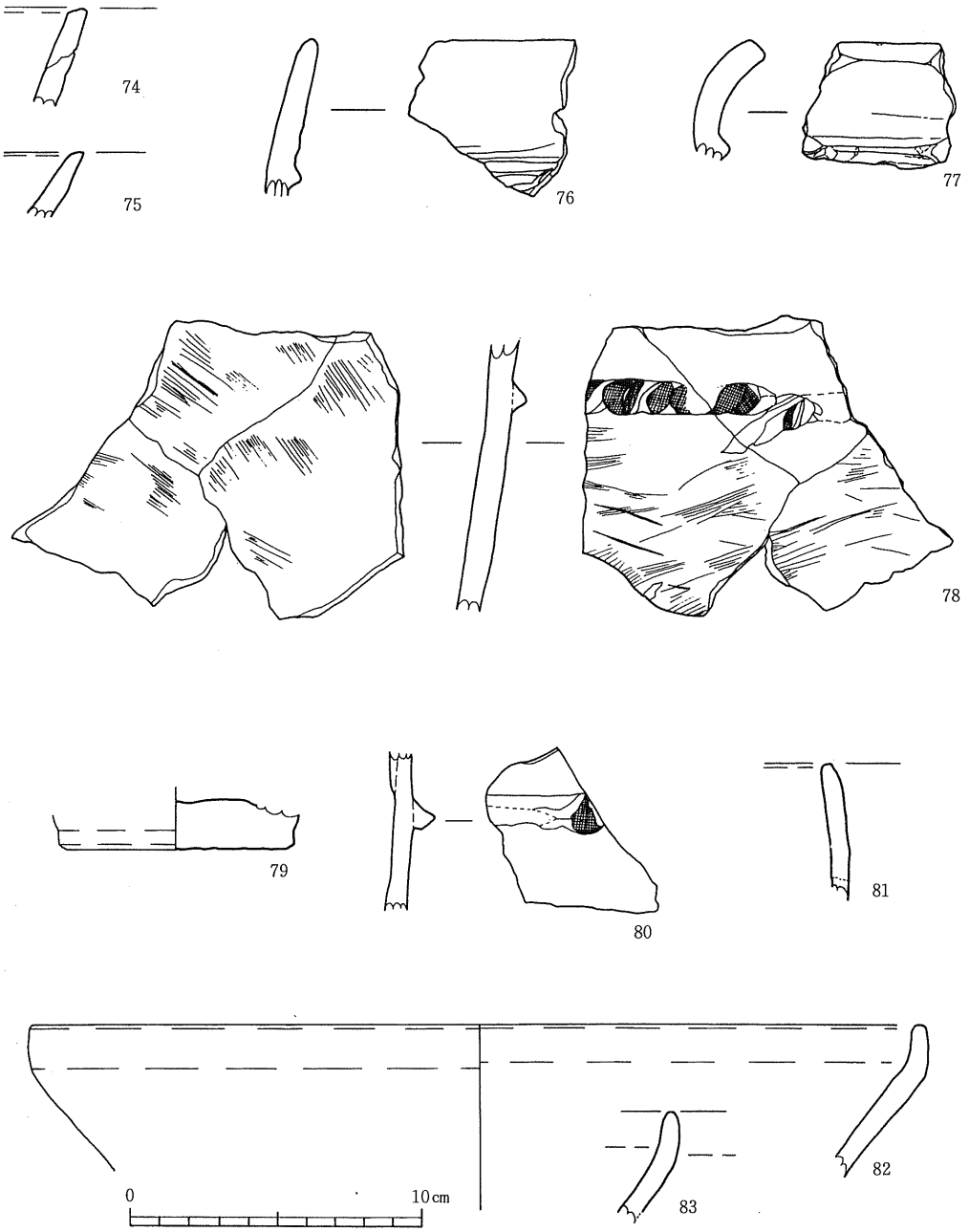


第13図　包含層内出土遺物実測図（1）

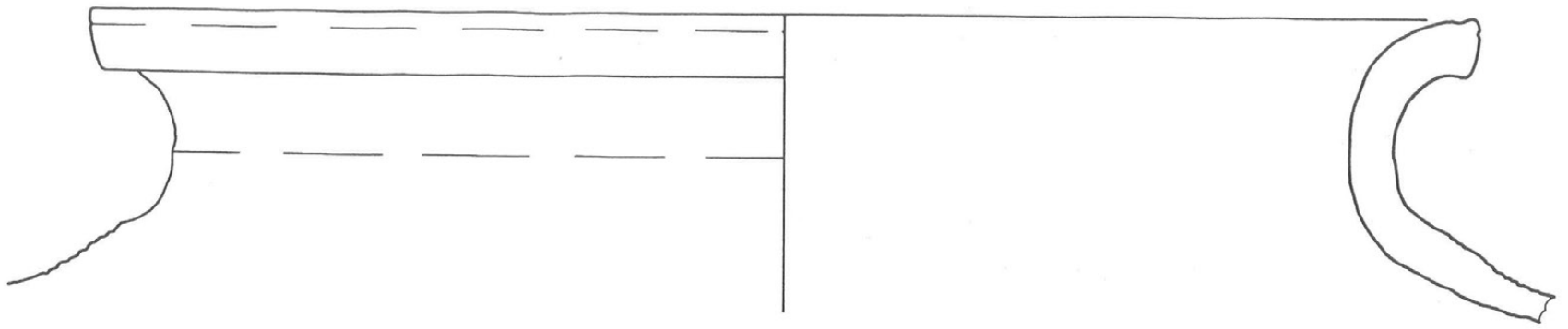


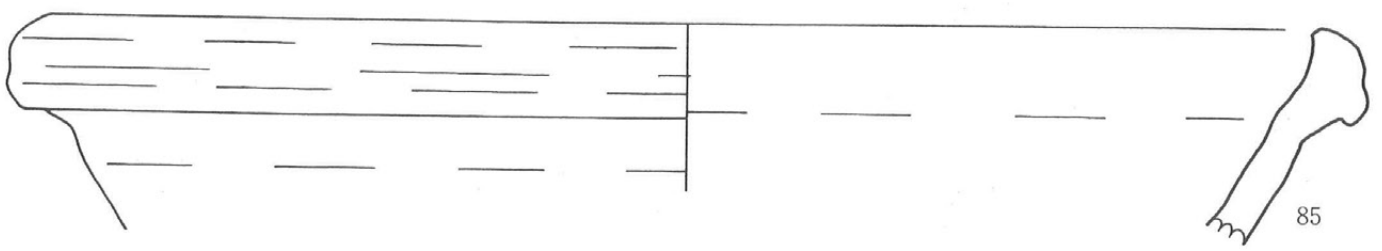
第14図　包含層内出土遺物実測図（２）

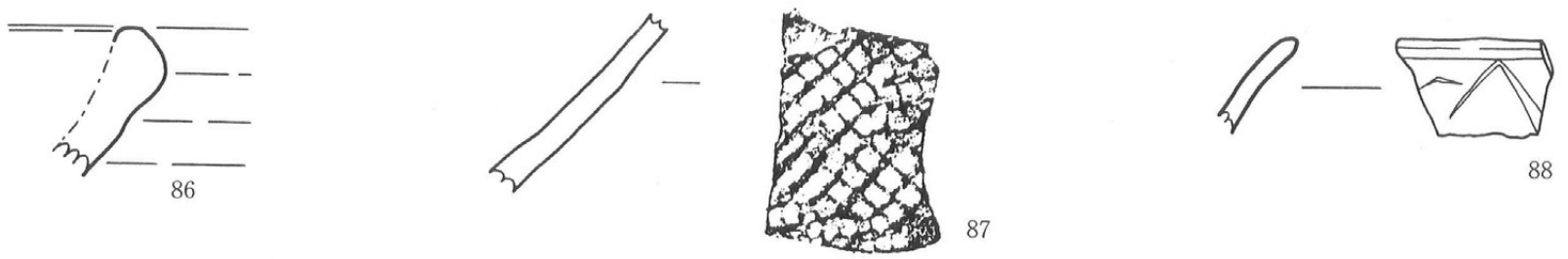
外面に横位のミガキが見受けられる。44は口唇部に刻みを持ち、突帯の貼り付けが明瞭に残る。45は壺の底部で、わずかに上げ底状を呈し、外面には縦位のハケ調整が施されている。刻み目突帯を有する46は甕の胴部片と思われる。47～49は口縁部で、全てに刻み目が見受けられる。50・51も46同様刻み目突帯を持つ胴部片である。51は突帯直下にわずかにミガキ痕が残る。52は口唇部の突帯が剝落している。52～55・57はM字状突帯甕口縁部である。56は口唇部上面に稜を持ち、突帯状の口唇部器肉は比較的薄い。胎土にはウンモを含んでいる。58は壺の底部である。59～61の胴部片は、全てに３条の三角突帯がみられる。62には外面に絡縄突帯状のものが見受けられる。63～73は高坏である。63・64の口縁部は比較的小柄なタイプである。65～67の口縁部は稜となる接合部が明瞭である。71の脚部内面にはケズリ痕が残る。72は脚部、73は坏部である。71・72は同型品かもしれない。74～78は甕である。78・80の胴部片は絡縄突帯を有し、布目が明瞭である。79は壺の底部か。82・83は鉢型土器である。82は口唇部にススが付着しており、その下は斜位のハケ目が明瞭である。84～87は須恵質陶器である。84は壺の口縁部である。85・86は東播系捏鉢の口縁部。88は龍泉窯系青磁碗の口縁部で、鎬蓮弁文が見受けられる。89～93は底面糸切り離しの土師器。94は陶器甕の口縁部。口径36.0㎝を測る。95は陶器碗の口縁部。白化粧土あり。口径12.2㎝を測る。96は陶器碗の底部。底径は5.1㎝。見込みは蛇ノ目釉剝ぎである。97は磁器碗。98は陶器碗である。99は片口の口縁部。100は陶器の甕で、口唇部に貝目積が見受けられる。101は碗口縁部。102は碗の底部。見込みは蛇ノ目釉剝ぎ状を呈する。103は染付碗口縁部である。104は擂鉢の口縁部。105・106は甕の底部である。

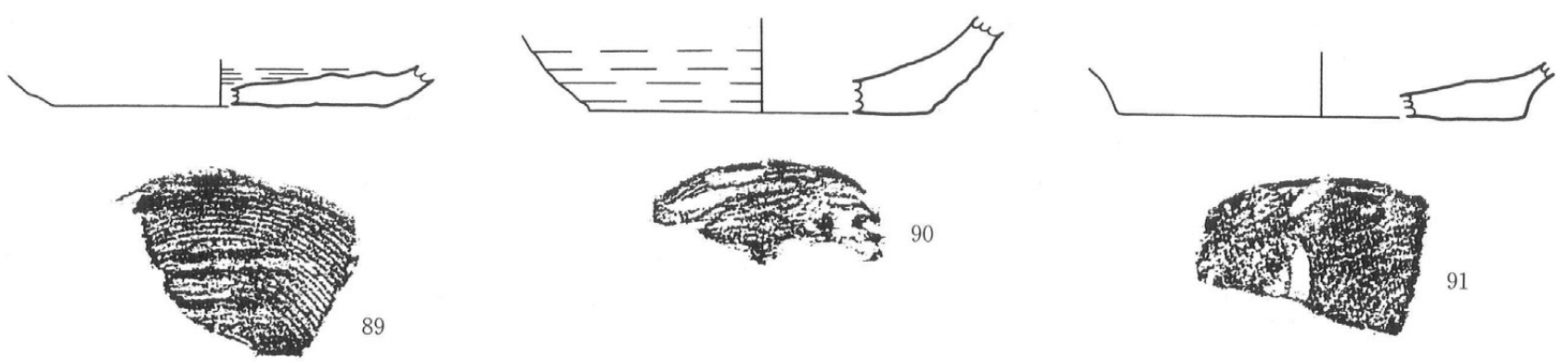


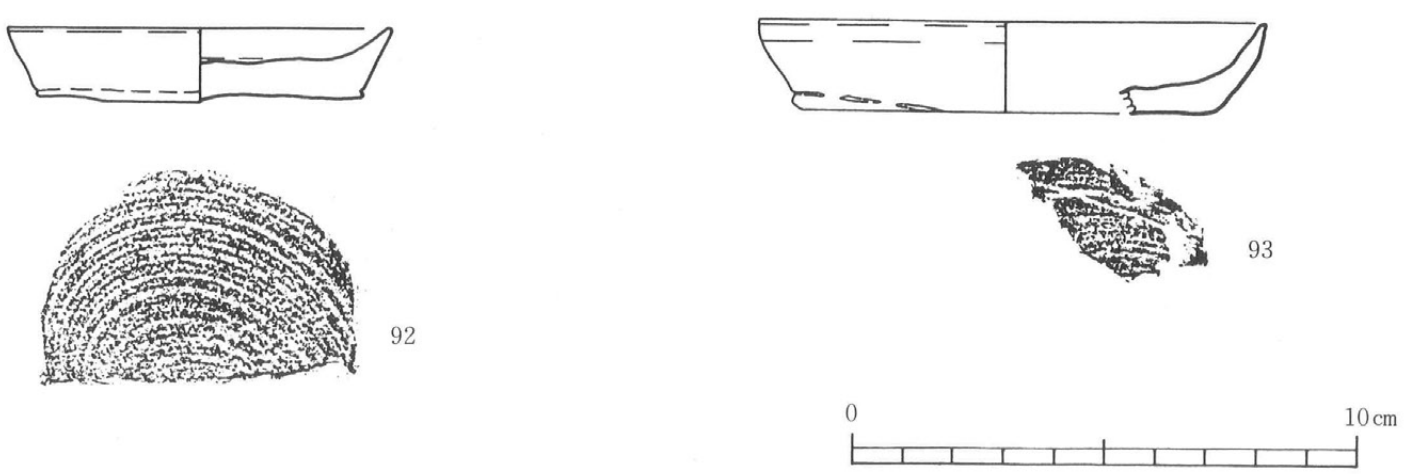
第15図　包含層内出土遺物実測図（3）



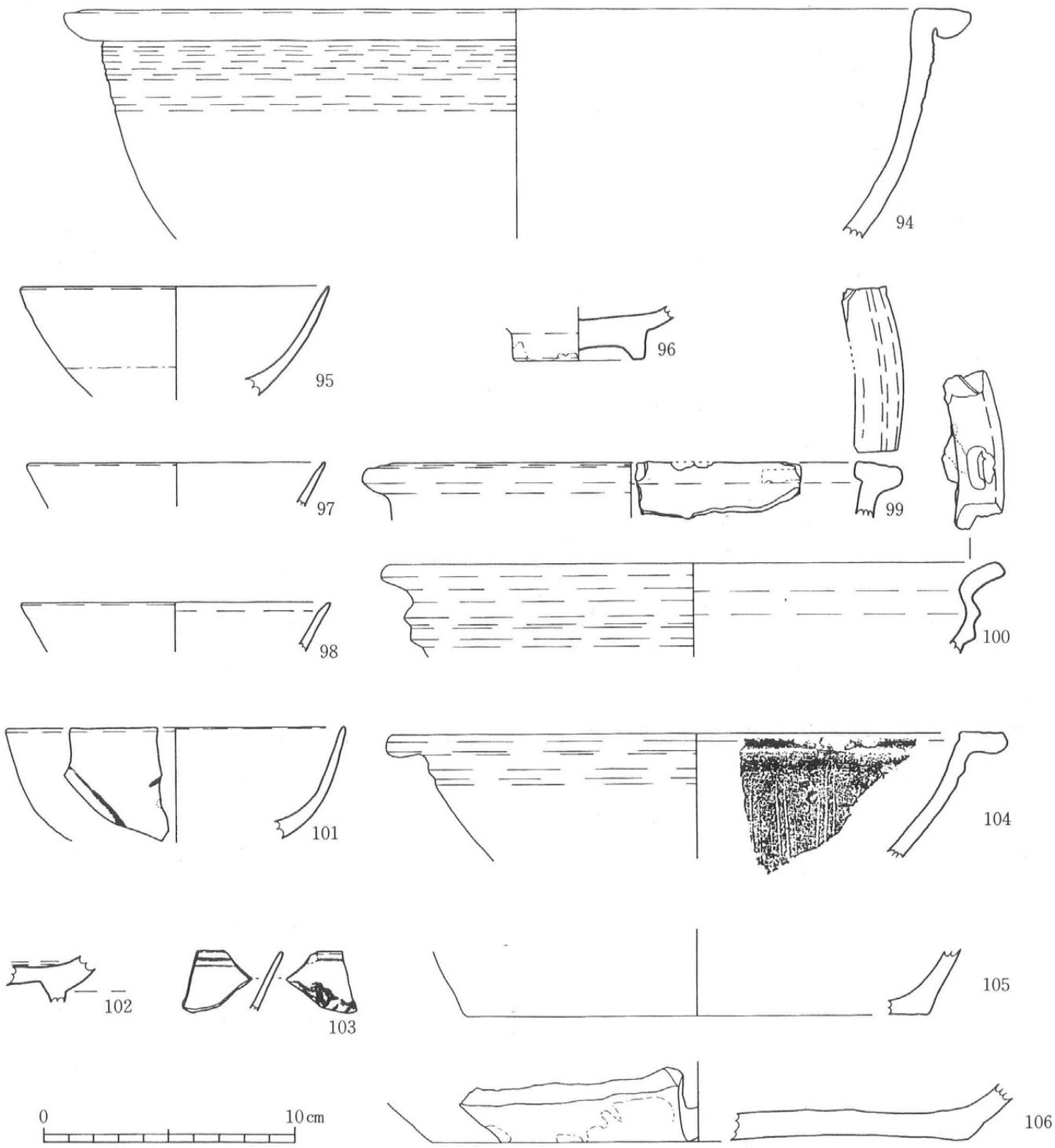








第16図　包含層内出土遺物実測図（4）



第17図　包含層内出土遺物実測図（5）

第１表　出土遺物観察表

＊記載について

1）表中の遺物番号は報告書掲載番号である。

2）調整については以下の略号を使用した。

ナデ＝N　ケズリ＝K　ミガキ＝M　ハケ＝H

遺物番号	種別・器種	遺構・層	出土区	法量			調整		取上番号	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
1	弥生土器	ＳＤ０１	Ａ－３	－	－	－			52	刻目突帯
2	弥生土器	ＳＤ０１	Ａ－３	－	－	－	ヨコＮ		20	刻目突帯
3	弥生土器 甕(口縁部)	ＳＤ０１	Ａ－３	－	－	－	ヨコＮ＋ タテＨ		50	刻目突帯・下城式
4	弥生土器	ＳＤ０１	Ａ－３	－	－	－	ヨコＮ		53	刻目突帯
5	弥生土器 甕(口縁部)	ＳＤ０１	Ａ－３	－	－	－	ヨコＮ	ヨコＮ	72	
6	弥生土器	ＳＤ０１	Ａ－３	－	－	－			145	底部
7	弥生土器 甕(口縁部)	ＳＤ０１		－	－	－	ヨコＮ		178	Ｍ字突帯
8	弥生土器 甕(口縁部)	ＳＤ０１	Ａ－３	－	－	－			44	口唇部欠損
9	弥生土器 甕(口縁部)	ＳＤ０１	Ａ－３	－	－	－			41	Ｍ字突帯
10	土師器 紡錘車	ＳＤ０１	Ａ－３	－	－	－			54	指頭痕あり 径－8.0cm
11	土師器 坏	ＳＤ０１	Ａ－３	12.1	8.5	3.4		ヨコＮ	23	糸切り・板状圧痕あり 外－ロクロ調整痕明瞭
12	土師器 坏	ＳＤ０１	Ａ－３	13.2	8.6	3.6			45＋ 78＋80	糸切り
13	土師器 鉢	ＳＤ０１		－	9.0	－			178	糸切り
14	土師器 坏	ＳＤ南埋土		－	9.0	－		Ｎ	180	糸切り
15	土師器 小　皿	ＳＤ０１		8.3	7.6	1.3			178	糸切り
16	土師器 小　皿	ＳＤ０１	Ａ－３	7.6	5.6	1.6	ヨコＮ	ヨコＮ	77	糸切り
17	土師器 小　皿	ＳＤ０１	Ａ－３	7.7	5.7	1.5～ 1.65	ヨコＮ	ヨコＮ	19	糸切り
18	土師器 小　皿	ＳＤ０１	Ｄ－７	8.0	6.2	1.5			178	糸切り
19	須恵質陶器 東播系捏鉢	ＳＤ０１	Ａ－３	29.8	－	－			27	魚住系？ 口縁部
20	須恵質陶器 東播系捏鉢	ＳＤ０１	Ａ－３	32.0	－	－			26	魚住系？ 口縁部
21	須恵質陶器 東播系捏鉢	ＳＤ０１	Ａ－３	－	－	－			22	魚住系？　胴部 タタキ目あり
22	須恵質陶器 東播系捏鉢	ＳＤ０１	Ａ－３	－	11.0	－			13	魚住系？　内－磨耗 底部　糸切り
23	陶器・備前 擂鉢(胴部)	ＳＤ０１	Ａ－３	－	－	－			46	
24	青　磁 碗(口縁)	ＳＤ０１		12.0	－	－			178	鎬蓮弁文 龍泉窯系
25	青　磁 碗(底部)	ＳＤ０１		－	5.0	－			178	
26	青　磁 碗(口縁部)	ＳＤ０１		－	－	－			180	鎬？蓮弁文 龍泉窯系
27	石製品	ＳＤ０１ 上層		－	－	－			177	
28	石製品 石　斧	ＳＤ０１	Ａ－３	－	－	－			28	磨製
29	土師器 小　皿	ＳＤ０２	Ａ－２	6.8	6.0	1.1			59	糸切り
30	土師器 小　皿	ＳＤ０２	Ａ－２	－	－	－			60	糸切り

遺物番号	種別・器種	遺構・層	出土区	法量			調整		取上番号	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
31	土師器 坏	ＳＤ０２	Ａ－２	－	9.0	－			67	糸切り
32	須恵質陶器	ＳＤ０３		－	－	－			184	タタキ目あり 焼成不良
33	弥生土器 甕(口縁)	ＳＤ０３		－	－	－	ヨコＮ	ヨコＮ	184	Ｍ字状突帯
34	弥生土器 甕(口縁)	ＳＣ０５	Ａ－４	－	－	－	ヨコＮ	ヨコＮ	156	ウンモ含
35	土師器 壺？(口縁部)	ＳＣ１０	Ａ－５	18.4	－	－	ヨコＮ		101	
36	弥生土器	ＰＩＴ５	Ａ－３	－	－	－			122	三角突帯 外－黒色
37	土師器 壺(底部)	ＳＣ１２	Ｂ－５	－	－	－			92	
38	弥生土器 甕(口縁)	ＰＩＴ４	Ａ－３	20.2	－	－	ヨコＮ	ヨコＮ	123	口唇部スス
39	染付 碗(底部)	ＰＩＴ６	Ａ－４	－	3.2	－			121	
40	弥生土器	ＰＩＴ７	Ａ－４	－	－	－	ヨコＮ		113	三角突帯
41	縄文土器 深鉢(胴部)	ＴＥＳＴ	４Ｔ	－	－	－				西平式
42	縄文土器 深鉢(口縁部)	一括		－	－	－			166	西平式？
43	弥生土器 甕(口縁部)	一括		－	－	－	ヨコＮのち ヨコＭ		166	口唇部刻目突帯 胎土ウンモ含
44	弥生土器 甕(口縁部)	一括		23.2	－	－	ヨコＮ	ヨコＮ	162東	口唇部刻目突帯
45	弥生土器 壺(底部)	一括		－	7.8	－	タテＨ		162東	
46	弥生土器 甕(胴部)	一括		－	－	－			162東	刻目突帯
47	弥生土器 甕(口縁部)	一括		－	－	－	ヨコＮ		170	口唇部刻目突帯
48	弥生土器 甕(口縁部)	一括		－	－	－			162東	口唇部刻目突帯
49	弥生土器 甕(口縁部)	一括		－	－	－	ヨコＮ		166	口唇部刻目突帯
50	弥生土器 甕(胴部)	ＴＥＳＴ	１Ｔ	－	－	－	ヨコＮ			刻目突帯
51	弥生土器 甕(胴部)	一括		－	－	－	ヨコＮ		166	刻目突帯
52	弥生土器 甕(口縁部)	一括		－	－	－			166	口唇部突帯剝落 胎土ウンモ含
53	弥生土器 甕(口縁部)	一括		－	－	－	ヨコＮ		166	口唇部Ｍ字状突帯 胎土ウンモ含
54	弥生土器 甕(口縁部)	一括		－	－	－	ヨコＮ	ヨコＮ	166	Ｍ字突帯
55	弥生土器 甕(口縁部)	一括		－	－	－	ヨコＮ	ヨコＮ	165	Ｍ字突帯 胎土ウンモ含
56	弥生土器 甕(口縁部)	一括		－	－	－	ヨコＮ	ヨコＮ	165	胎土ウンモ含
57	弥生土器 甕(口縁部)	一括		24.4	－	－	ヨコＮ	ヨコＮ	166	Ｍ字突帯
58	弥生土器 壺(底部)	一括		－	9.4	－	Ｎ		161	
59	弥生土器 壺(胴部)		Ａ－４	－	－	－	ヨコＮ		128	三角突帯 胎土ウンモ含
60	弥生土器 壺(胴部)		Ａ－４	－	－	－	ヨコＮ		149	三角突帯 胎土ウンモ含
61	弥生土器 壺(胴部)	ＴＥＳＴ	６Ｔ	－	－	－	ヨコＮ			三角突帯 胎土ウンモ含
62	土師器	一括		－	－	－			161	
63	土師器 高坏(口縁部)	ＴＥＳＴ	４Ｔ	12.2	－	－	ヨコＮ	ヨコＮ		
64	土師器 高坏(口縁部)	一括		12.8	－	－	Ｎ	ヨコＮ	162東	
65	土師器 高坏(口縁部)	一括		17.4	－	－	ヨコＮ	ヨコＮ	166	

遺物番号	種別・器種	遺構・層	出土区	法量			調整		取上番号	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
66	土師器 高坏(口縁部)	TEST	4T	18.8	−	−	ヨコN	ヨコN		
67	土師器 高坏(口縁部)	一括		19.8	−	−	口唇部 ヨコN	ヨコN	160	
68	土師器 高坏(口縁部)	一括		21.0	−	−	ヨコM		161	
69	土師器 高坏(脚部)	一括		−	−	−	ヨコN	N	161	内−黒色
70	土師器 高坏(脚部)	TEST	4T	−	−	−				内外−磨耗
71	土師器 高坏(脚部)	TEST	4T	−	−	−	ヨコNのち タテM	K		72と同型品
72	土師器 高坏(脚部)	TEST	4T	−	−	−	ヨコNのち タテM			71と同型品
73	土師器 高坏(口縁部)	一括		−	−	−	ヨコN		162東	
74	土師器 甕(口縁部)	一括		−	−	−		ヨコN	162東	接合部明瞭
75	土師器 甕(口縁部)	TEST	4T	−	−	−	ヨコN	ヨコN		
76	土師器 甕(口縁部)	TEST	4T	−	−	−	ヨコN	ヨコN		絡縄突帯？
77	土師器 甕(口縁部)	一括		−	−	−	ヨコN	タテN	166	口縁下突帯
78	土師器 甕(胴部)	一括	A−5	−	−	−	H	ナナメH	115 166	絡縄突帯
79	土師器 壺(底部)	一括		−	7.2	−			166	
80	土師器 甕(胴部)	TEST	4T	−	−	−	タテH			絡縄突帯
81	土師器 鉢？(口縁部)	一括		−	−	−			166	
82	土師器 鉢(口縁部)	一括		30.8	−	−	ナナメH	ヨコN	166 171	口唇部スス
83	土師器 鉢(口縁部)	TEST	4T	−	−	−				口唇部スス
84	須恵質陶器 東播系壺	TEST	6T	29.8	−	−	ヨコN	ヨコN		口縁内−沈線あり 外−タタキ目あり
85	須恵質陶器 東播系捏鉢	一括		25.2	−	−	ヨコN	ヨコN	165	
86	須恵質陶器 東播系捏鉢	一括		−	−	−	ヨコN	ヨコN	162	
87	須恵質陶器	TEST	1T	−	−	−				外−タタキ目あり
88	青磁 碗(口縁部)	TEST	1T	−	−	−				鎬蓮弁文
89	土師器 坏	TEST	6T	−	7.0	−				糸切り＋板状圧痕 内−ロクロ調整痕明瞭
90	土師器 小皿	TEST	1T	7.6	6.2	1.5				糸切り
91	土師器 皿	一括		10.2	8.5	1.8			161	糸切り 外−スス
92	土師器 坏	一括		−	7.2	−			165	糸切り
93	土師器 坏	TEST	1T	−	8.6	−				糸切り
94	陶器 甕	一括		36.0	−	−			164	薩摩系
95	陶器 碗	一括		12.2	−	−			175	白化粧土
96	陶器 碗(底部)	一括		−	5.1	−			166	見込み−蛇ノ目釉剝ぎ 高台内無釉
97	陶器 碗(口縁部)	TEST	4T	11.8	−	−				
98	陶器 碗(口縁部)	一括		12.3	−	−			160	
99	陶器 片口(口縁部)	一括		17.8	−	−			162東	薩摩系
100	陶器 鉢(口縁部)	一括		24.0	−	−			165	薩摩系 口唇部−目積痕

遺物番号	種別・器種	遺構・層	出土区	法量			調整		取上番号	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
101	陶器 碗	一括		13.4	−	−			161	
102	陶器 碗(底部)	一括		−	−	−			168	見込み−蛇ノ目釉剝ぎ
103	染付 碗(口縁部)	一括		−	−	−			166	
104	陶器 擂鉢(口縁部)	一括		22.0	−	−			166	薩摩系
105	陶器 甕(底部)	一括		−	18.4	−			165	薩摩系
106	陶器 甕(底部)	一括		−	21.2	−			167	薩摩系 目積痕

第5章　ま　と　め

今回の調査は面積も矮小で、かつ遺跡総体からみればごく部分的なものにしかすぎないが、これまでほとんど調査の行われることのなかった当地域の歴史的成り立ちに関する貴重なヒントを提示してくれた。特に区域内中央やや西側を南北に走る箱堀状の溝状遺構（ＳＤ０１）は注目すべきものではなかろうか。ＳＤ０１は底面がアカホヤ直下層に達し、検出面からの深さ約1.6ｍ、検出面での最大幅は4.2ｍを測る。溝壁は西側が急で東側は比較的緩斜面状を呈している。東側には３条の道路状遺構と思われる硬化面を伴う。埋土中からは多数の遺物が出土しており、主に上層からは３のような下条式タイプ的なものを含むいわゆる刻目突帯系やM字突帯系、ほぼ前期末～中期のものと思われるものが出土している。一方、下層で検出した中世の遺物は土師器・須恵質の陶器である。陶器は魚住系のものと考えられ、そのプロポーションから14Ｃの年代を与えることができよう。このことから、ＳＤ０１は14Ｃ代の所産とも考えることができる。当遺跡は舌状台地の付け根部分に立地するが、ＳＤ０１は舌状部を遮断するかのような走向軸を示しており、本遺構の機能がどんなものであったかを窺わせてくれる。

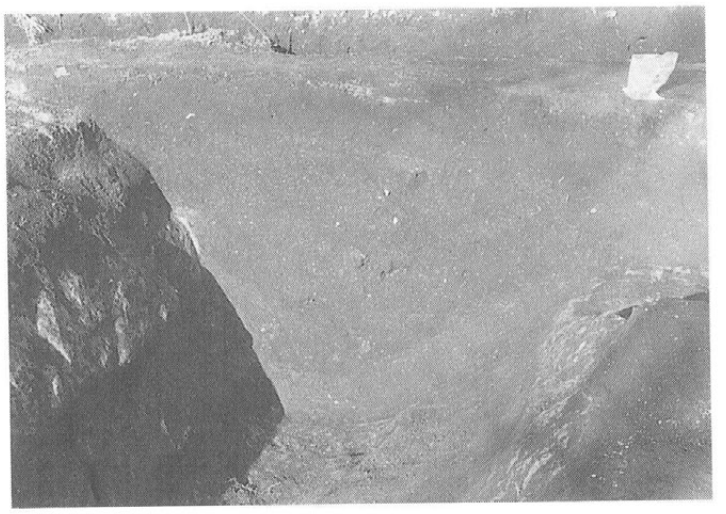
先にも述べたとおり、当遺跡は350㎡と狭い範囲内での調査であったため、これのみで各遺構の機能・性格等推し量るのは難しい。今後の当地域における調査成果等の増加を待ちたい。

引用・参考文献

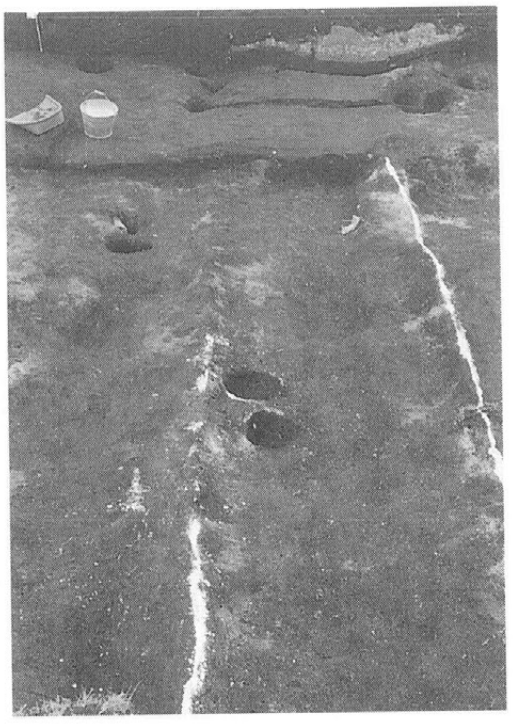
・矢部喜多夫1986『都城市遺跡詳細分布調査（中央部）』
都城市文化財調査報告書第５集　都城市教育委員会
・矢部喜多夫・乗畑光博・下田代清海1990『都城市遺跡詳細分布調査（北西部）』
都城市文化財調査報告書第12集　都城市教育委員会
・乗畑光博・野間大作1989『都城市遺跡詳細分布調査（北東部）』
都城市文化財調査報告書第８集　都城市教育委員会
・矢部喜多夫・乗畑光博1987『都城市遺跡詳細分布調査（南部）』
都城市文化財調査報告書第６集　都城市教育委員会

図版１

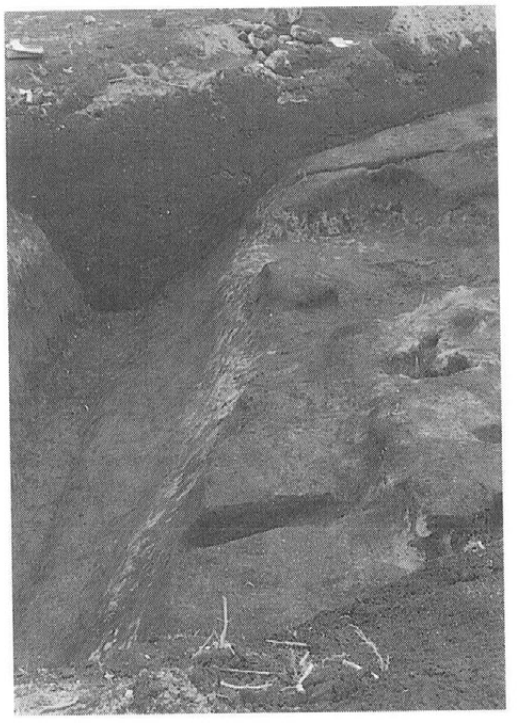
調査区東側部分



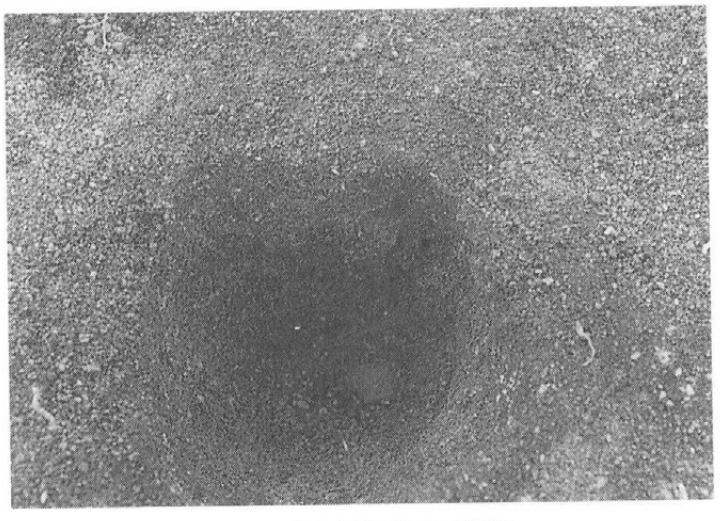
ＳＤ０１



ＳＤ０３・０４



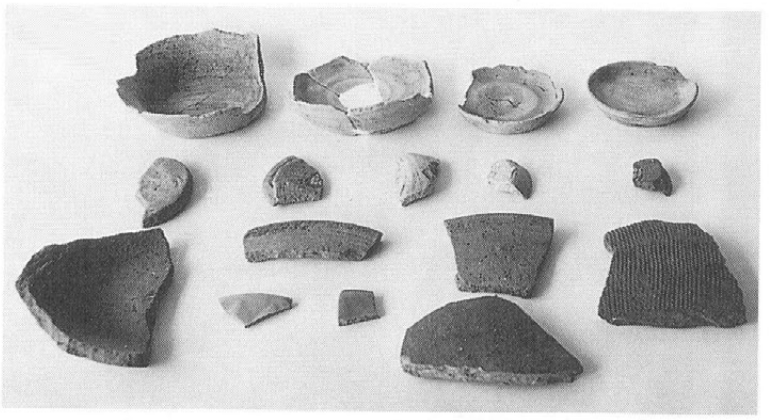
ＳＤ０１



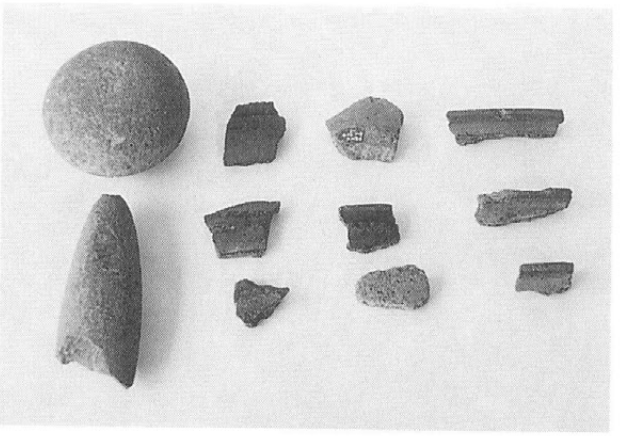
Ｐｉｔ 内遺物出土状況

ＳＤ０１内遺物出土状況

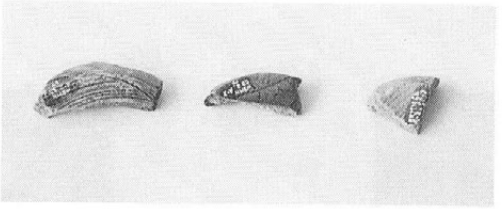
図版２



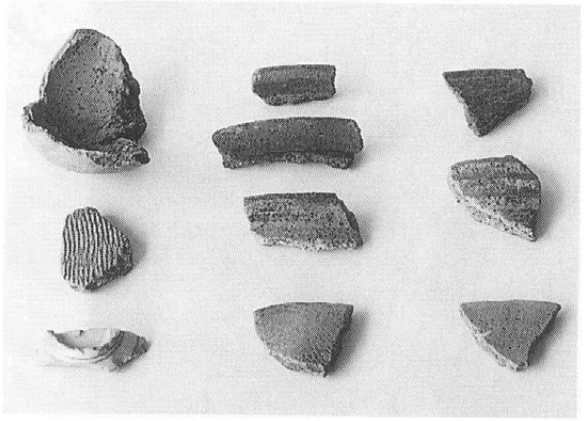
ＳＤ０１内出土遺物



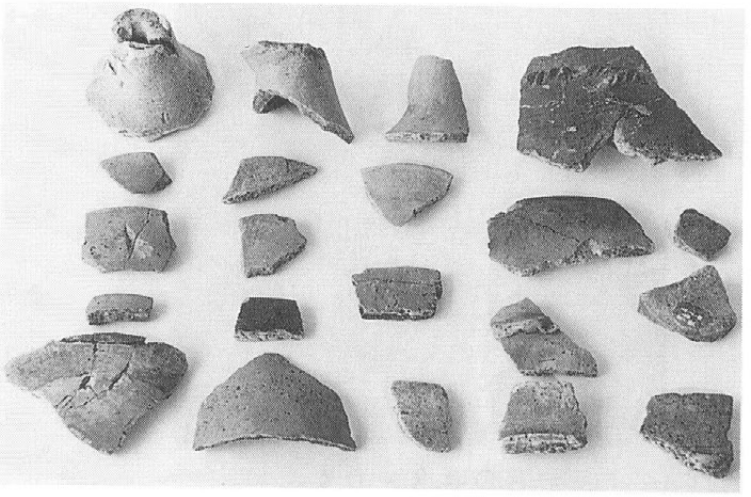
ＳＤ０１内出土遺物



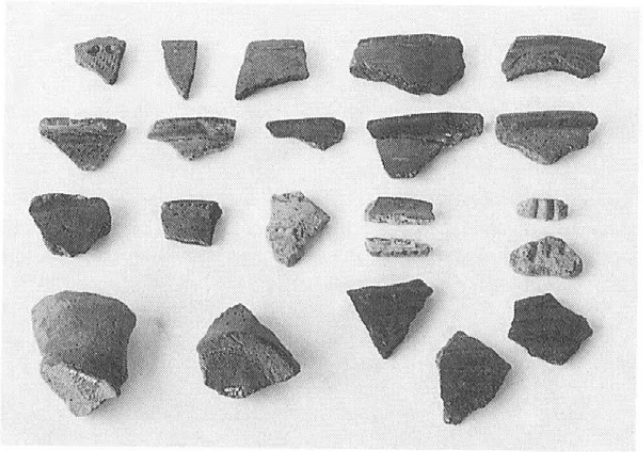
ＳＤ０２内出土遺物



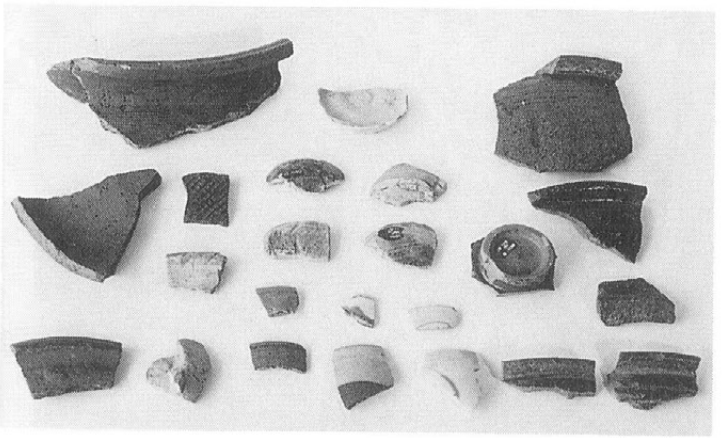
遺構内出土遺物



遺跡内出土一括遺物



遺跡内出土一括遺物



遺跡内出土一括遺物

都城市文化財調査報告書第36集

平　峰　遺　跡

民間分譲住宅地造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 年　平成７年３月

編集発行　都 城 市 教 育 委 員 会
〒885
宮崎県都城市姫城町６街区21号
TEL０９８６－２３－２１１１

印　　刷　㈱みやこ印刷
都城市大王町51-22